お目にかゝり度い、と、いふのですが、會うて戴けませうか』

と、いはれて、私は、奇異の想ひをした。その人は、著者の講演にも、屢々上つて居るし、快傑傳にも書いて有るが、未だ一度も、會つた事はない。その人が、今、突然會ひ度い、と、いふのであるから、

『宜しい、會ひませう』

と、答へた。

『それでは、講演が終つてから、お宿へ、參る、ことにいたしませう』

『お待ちうけ、いたします』

『實は、丈太郎さんも、此處へ來て、拜聽して居るのですから、私が、伴れて參りませう』

『どうか、さうして下さい』

高島君は去つて、著者は再び演壇へ立つた。どの人が、丈太郎老人か、と思つて、著者は、講演しながらも、ふかい注意を拂つたが、それらしい人は、見當らなかつた。

講演は十時過ぎに終つて、著者は伏源へ歸つた。間もなく、高島君は、丈太郎老人を、伴れて來た。此時に、著者の想像は、全く裏切られて、長い間、斯う云ふ人であらう、と思つて居たのが、全然で、違つて居た。

歳も、思つたよりは、ずゝと若く、人物も上品で、挨拶をする調子も、別に變つた所がなく、只だ普通の人に比べると、馬鹿丁寧な所が、異つて居る丈けで、何の奇もなかつた。

高島君は、此地方の青年會で、牛耳を、執つて居る人で、之れも、品格の在る、紳士らしい沈着いた調子の、何となく他に、好感を與へる風の人であつた。

『此老人が、丈太郎さんです』

『さうでしたか、私は、伊藤ですが、初めてお目にかゝります』

『恐れ入ります。私は、へー、丈太郎で御座います。旦那樣には、いろ〳〵御恩に相成りまして、一度は、御禮に出たい、と、思つて居りましたが、ツイ、その機會がなくつて、今日に、なりましたけれど、少しも、忘れた事は御座いません。旦那樣の書物で、私は、へー、皆樣に、可愛がられまして、いろ〳〵、都合のよい事が、御座いました。それは、皆な旦那樣が、彼アいふ、書物を出して下さつた、御蔭と、厚く御禮を、申上げます』

と、頻りに感謝されるので、著者も、何となく嬉しかつた。それから、種々と、當時の物語りが繰返へされて、時刻の移るを忘れた。老人は、やがて、記念帳を出して、何か、書いてくれ、といふから、之れに應じた。

故陸奥宗光伯と、不思議の因緣ある、丈太郎翁に會うて、當時を語り、感慨に不堪、記念の爲め筆を執る。

依於仁遊於藝

斯う書いてやつたら、丈太郎老人は、大喜びで、その夜は引取つた。翌日の朝はやく、また、老人は、やつて來て、自分の家へ揭げるから、何か、書いて貰ひ度い、といふので、それは、後日、書いて、送る約束をした。

その時、老人は、風呂敷包を持出して、どうか、之れを視てくれといふから、そのうちの書類を、段々、讀んで見る、と、それは神武天皇行宮の、遺趾についての、書類であつた。

今、老人が、住むで居る所は笠岡から、南に當る、海上一里、神の島と稱する、離れ島であるが、これは、昔の黃薇高島の事で、神武天皇が、日向から、御出まし遊ばして、東夷征伐に、御下り遊ばす時、三年の間、御駐輦になられたのが、即ち此島であつた。この行宮の遺趾に、記念碑が建てられて在る。それの運びを、つける迄の書類であつたから、著者は些か驚いた。

三島中州先生の筆に成る、大きな記念碑の傍らに、老人が愼ましやかに、控へて居る寫眞が一枚、その寫眞は丈太郎さんであつた。その外に、一と抱へもあらう、と思はれる、大樹の寫眞、これは行宮當時のものと、傳へられて居る。もう一枚は、中州先生の寫眞であつた。

老人は、斯ういふ事にも、盡力して、それを、仕果して居るのであつた。中州先生の令嗣桂さんの書面も見た。私は、偉い老人だ、と思つた。

今では、老人も、神の島の住人となつて、妙見丸といふ、船の名で、宿屋をして居る、との事であつた。夏は海水浴が開けて、遠近人は、通ひ汽船で、澤山に出かける、と云ふ事だ。星島代議士の父も、贔負にして、毎年出かける、と云つて居た。その晩、老人は、復た講演を、聽きに來て居た。陸奥の名が、講演のうちに、出て來ると、いかにも、嬉しさうな、顏をして居た。二十日の朝、廣島へ、向ふ可く、伏源を出かける、と、老人は息を切りながら、やつて來て、辭退するのも肯かずに、停車場へ、送つて來て、汽車の出る迄、立つて居た。

二

明治二十年頃の、陸奥が、亞米利加の、全權公使を勤めて、まだ、華盛頓に居た所へ、外務大臣の青木周藏から、電報を、うつて來た。それは陸奥を、農商務大臣に推薦するから、すぐ歸つて來い、と、いふのであつた。

陸奥は、大急ぎで歸朝した。所が、どういふ都合であつたか、すでに農商務大臣としては、岩村通俊が、任命されて居た。陸奥は、非常に立腹した。公使をやめて、亞米利加へ移住する、と云ひ出して、誰れが、何と云ふても肯かなかつた。

斯うなつては伊藤博文の外に、その怒りを、宥め得るものはない。外國へ、使して居るものを、大臣にするから歸れ、と云うて、呼戻して置いて、本人が、歸つて來たら、大臣の椅子は、他の人が、占めて居たのでは、たとへ陸奥でなくても怒る。

伊藤は、未だ伯爵であつたが、その勢力に於ては、既に第一位であつた。陸奥とは、深い交りがあつて、陸奥も、伊藤には、强て、反抗する事は出來なかつた。それには、普通の交際からのみではなく、特別の事情もあつた。

明治十一年に、陸奥が、内亂陰謀の罪に依つて、人獄した。その頃から、病身であつた陸奥は、五年の刑を、受けた時、既う再び、世に出る事は出來ぬ、と思つた。それを、伊藤が惜んで、内務卿の椅子に、居たのを幸ひ、法規外の手當をする可く、縣令や、典獄へ、内命を下して、無事に、出獄し得るやうにした。政府に叛いて、入獄して居るものを、それ迄にして、救うた伊藤は、さすがに、偉い所があつた。

その後の交情は、管鮑も啻ならず。兩者の關係は、尋常でなかつた。徵役歸りの陸奥を、全權公使に推したのも、今度、大臣に進めやうと謀つたのも、實は、伊藤の盡力からであつた。

伊藤が、それほど力を入れるだけ、それ丈け、反對するものもあつて、大臣に推薦したが、有力な故障が、はいつたので、折角に、呼び戻しながら、却て、陸奥に、恥辱を與へるやうな事に、なつたのだ。併し、その事情は、伊藤から、詳しく話しをして、陸奥にも、了解が出來た。それにしても、當分は、任地へ行かず、日本に、遊んで居よう、となつて、選ばれた地が、播州の舞子であつた。

夫人と令孃、その外に、岡崎邦輔、數名の召使、それらを伴れて、舞子へ、やつて來た。夫人の前身は新橋の藝者で、柏家の小兼と謂つた人で、評判の俠妓、生ッ粹の江戸產れだ。子供は、此孃さんがあるばかり、今の廣吉と、古河市兵衞の養子になつて死んだ、潤吉は、先妻の子であつた。

その、先妻と、云ふのが、矢張り泥水から、出た人で、大阪の難波新地に米子と、呼ばれて居た、藝者であつた。女道樂の强かつた、陸奥は、二度ともに、藝者を妻にしたのだが、その妻は、二度ともに大當りで、どちらも、賢夫人であつた。此點に於ては、極めて妻運の强い人であつた。

舞子へ、伴れて來た、令孃が、内田康哉と、婚約のあつた娘で、後の内田外相の妻は、此令孃が、亡くなられてから、大和の豪農、土倉庄三郎の娘を迎へたのであつて、内田は、陸奥に認められたのが原因で、はやく外相になれたのであつた。原敬は陸奥の乾分であるから、どうしても内田を重用する事になる。内田は、實に僥倖な人だ。

舞子へ來てから、陸奥は、毎日の樣に海岸を、散歩して居た。白い砂をふみ、青い松の間を歩く。足許には、綺麗な波が、靜かにうち寄せて來る。すぐ前は、畫のやうな淡路島、縱令、通ふ千鳥は無くとも、その風景は、心の濁りを除るに、此上もない。病氣は、日增しに快くなつて來た。

夫人や、令孃を伴れて、今日も、海岸を漫歩き、明石の方へ、磯傳ひに、やつて來る、と、小さい流れがあつて、水は、割合に深く、一寸徒歩では、渡り難い。一同が躊躇して居る、所へ、丁度、通りかかつたのが、例の丈太郎であつた。

『旦那樣、渡して上げませうか』

唯見れば、見苦しい、服裝をして居る、一個の船頭らしい、男であつた。從いて居た、岡崎邦輔は、笑ひながら、丈太郎に答へた。

『どうして、渡すつもりか』

『へえ、背負つて上げやせう』

『さうか、皆んな背負つてくれるか』

『一人でも二人でも、同じこつた』

流石に、夫人と令孃は、顏を見合せて、すぐ背負さらう、と、しなかつた。それを、岡崎が促して、丈太郎の背中を、借りる事にした。斯くて、丈太郎は一同を背負つて、流れを渡つて了つた。半日を遊びくらして、歸る時も、同じやうに、丈太郎が、背負つてくれた。

宿坊へ、歸つて來る、と、丈太郎も、跟いて來た。陸奥は、丈太郎を、座敷へ上げて、

『いろ〳〵世話になつた。まア、悠々、話してゆくが可い』

『へえ』

夫人は、陸奥に聞いて、いくらかの金を、紙に包んで、丈太郎の前へ出した。

『これは、僅の志しですから、取つて置いて下さい』

と、いふのを聞いて、丈太郎は、それを突戻した。

『私は、そんなものを、貰ひ度くねえだ』

『まア、さういはずと……』

『私は、外に頼みてえ事が、あるだ』

『それは、何を……』

『旦那樣に、頼みがあるだ』

金包を突戻して、外に望みがある、といふので、一同は、不審に思つた。陸奥は笑ひながら、

『どういふ事が、望みか』

『船の名を、書いて貰ひてえだ』

『エッ、船の名を……』

『へえ』

『可矣、書いて遣はす。何と書けば、可いのか』

『妙見丸と、書いて下せえ』

『ふふーむ、妙見丸と……』

『へえ』

『妙見丸は、面白くないから、別の名を、書いて遣はさう』

『さうかね』

陸奥は、紙を展べて、筆を執つた。墨痕淋漓、書現はしたのは、陸奥宗光丸の五字であつた。

『難有う御座えやす』

丈太郎は、無雜作の態度で、それを、持つて歸つた。陸奥宗光が、如何なる人であるかを、全く知らなかつたらしい。

後で、丈太郎は、陸奥の事を、誰れかに聞いたが、それでも、一般の人の思ふ程に、陸奥を、難有く思はず、之れを緣に毎日のやうに、やつて來て、いろ〳〵の用事を、してくれる。その語にも、行ひにも、眞情が、籠つて居て、胡麻化しもなければ、少しの追從もない。陸奥は、すつかり、氣に入つて了つた。

三

政府に變動があつて、陸奥は、農務商大臣になつた。大臣としての眞價は、一般に認められた。二度目の、伊藤内閣に入つて、外務大臣になつた。多年の希望は、此に於て充たされ、日清戰爭や、條約改正で、いよ〳〵、手腕の鋭さを示した。

却說、丈太郎は陸奥に別れてから、荷積みの船頭で、その日を送るうちに、その事が評判になつて、追々、人にも知られ、得意の旦那にも可愛がられて、陸奥宗光丸は、どこの港へ行つても、大人氣を、ひきつけて、日清戰爭の後には、新らしい、大きな、船をつくつて、陸奥宗光丸の名を、刻み込んだ。別に書いて貰つた、妙見丸の三字は、板に彫りつけて、船の額にした。

その時分に、陸奥へ送つた、禮狀は、今でも、同家に秘藏されてあるが、陸奥も、夫人も、令孃も、今は、亡き人の數に入つて、此事を、知つて居るものは、岡崎ばかりである。

丈太郎は、船頭をやめて、神の島で、宿屋をはじめ、夏は、海水浴の客を扱つて、よく榮へた。來る客も、客も、

みな此事を聞きたがつて、丈太郎は、何時も、昔話を、くり返して居た。著者の快傑傳は、其度毎に引合になるので、ボロ〳〵になつて了つたが、丈太郎は、新らしいのを買はず、ボロ〳〵な快傑傳を、大切に扱つて、宗光丸の緣起を語る、唯一の證據にして居た、との事だ。

古い快傑傳に書いた所と、事實とは、大に違つてるが、それは著者が、承知の上で、運へて書いたのである。つまり、陸奥から、船に、命名して貰つた、事實さへ明かにすれば、あとの脚色は、どうでもよい、と思つて、單に面白く、書綴つたのであつたが、著者は、少しの豫期する所もなく、偶然、丈太郎に會つたのは、之れも、故人の引會せではないか、と思つた。

丈太郎の姓は、長舗であるが、翁も、近年、世を逝つた。

壯士物語

續

縣會の波瀾

一

明治二十四年の十一月二十五日から、埼玉縣會が開かれる事になつた。非開通派の中堅ともいふ可き、兒玉郡の有志は、浦和の山口屋といふ、宿屋に陣取つて、盛に活動を始めた。之に對する、開通派の運動は、その初こそ、暗中に飛躍して居たが、此頃では、もう公然と、爭ひ始めるやうになつて、追々、其の運動振が、露骨になつて來た。縣會の開會される前に、縣知事首め、理事者の方から兩派の調停を試みたが、總て無効に歸して、軋轢は激しくなるばかりであつた。

前から、此の問題が、評判になつて居たので、ホンの開會式を行ふにすぎぬ日であるのに、傍聽席は、薄暗い中から、詰掛て來て、開會前には、滿員であつた。議事堂の周圍には、澤山の人が、集まつて居て、ワイ〳〵騒いで居る。議長には、開通派の根岸武香が、なつて居たのであるから、開通派の爲には、何事に付けても、便宜が多かつた。

愈々開會となり、久保田知事から、開會に就いての式辭があり、議長が、議員一同に代つて、答辭を述べる。それから、豫算案の大綱に付いて、朗讀が終り、豫算の大體に就いて、議事を開かう、といふのである。其の前に、豫算案に對する、議員からの質問が始まるのだ。時に、

『議長、二番』と叫んで、立上がつた者がある。傍聽席は、動搖いて來た。

『二番』

『本員は、豫算案の質問に、入るに先立つて、常置委員諸君に對して、質問をなすべきことがあります。此の場合に於いて、議長は、それを御許し下さいますか』

『何ういふ事柄ですか』

『それは無論、豫算に關係があるのです』

『それならば、宜しい』

二番の席に、着いて居たのは、岡戸勝三郎と、いふ人であつた。胸にまで、長く垂れて居る、髯は、七分通り白かつた。古い自由黨員で、埼玉縣の岡戸が、何か質問を、常置委員に向つてする、といふのであるから、傍聽人は、固唾を飲んで、岡戸の發言を、待つて居る。

『本員が、常置委員諸君に、質問したい、といふのは、今、頻に世間で、評判の高い、熊谷より寄居町を經て大宮に達する、道路開通費の一條に就いて、種々常置委員諸君の身に付けて、悪い噂がある。併しながら、我々は、常置委員諸君の平生を、知つて居るから、さういふ悪い噂のあるが如き、醜穢なる行ひのある、といふことは信じないのであります。然るに、一二の新聞雜誌を見ますると、此の開通問題に就いて、我々が收賄をした、といふ事實は毫末も無いのである、といふ、取消文が出て居る、それには、常置委員諸君の名前が、悉く連ねてあるが、それに就ては敢て議論は無いのだが、埼玉縣會常置委員といふ、肩書を付けてあるのは、如何なる次第でありますか。それを質問したいのです。常置委員は、縣の豫算案を、組立てる上に於て、理事者の監督をして、それに協賛を與へる、といふ職分であるとは、心得て居るが、自分等の收賄した、といふ風説に對して、取消文を出す場合に、常置委員の名稱を用ひた、といふのは、甚だ穩かならぬことゝ考へるが、何ういふ譯で、常置委員諸君は個人として取消しを出さずして、常置委員の名義を以て、取消しを出したのであるか。それを質問したいのであります』

此の質問は、傍聽人首め、開通派の連中も、更に豫期して居なかつたのだから、晴天に霹靂を聞くの感があつた。常置委員の一人、高橋莊右衛門は、徐に立つて、

『議長、三十番』

『三十番』

『本員は、此の際に於いて、二番議員の質問に對して、御答へをします。本員等が、常置委員の名義を以て、收賄の風説に對する、取消文を、新聞雜誌に掲げたのは、悪い事とは思つて居りません。少くも我々が、諸君の信任に依つて、常置委員の席を、汚して居る、其の職責の上に於いて、收賄事件沙汰が起つたのであるから、左樣なことは致さぬ、といふ、廣告を出す、といふ、簡單な事實は、敢て二番議員の如く、難しい理窟を言うて、追窮する必要はなからう、と思ふのです。從つて本員は、之れ以上の説明を、必要と思ひませぬから、左樣御承知を願ひます』

大島寛爾は、三十四番の席に、着いて居たのであるが、高橋の答辯を聞くと、直に立上つて、議長に、發言を求めた。兎に角、賣出しの代言人ではあつたし、浦和町では、高橋安爾と、並び稱されて居たので、傍聽席までが、靜になつた。

『本員は、敢て質問は致しませぬ、唯、高橋委員が、二番に對する、答辯に就いて、辯駁をしよう、と思ふ。二番議員が質問したのは、常置委員の職分は、常置委員に、なつて居る者、本人の名譽を維持する爲に、濫りに使用すべき役名でない、といふことが、論據になつて居るやうに、聞取つたのでありますが、それに對して、高橋委員は、賄賂を取らぬ、といふ、取消文を出す、といふことは、敢て害の無いことであるから、差支はあるまい、といふ意味の答辯をして居られる樣でありますけれども、本員の考へる所に依りますれば、さういふ、一身の利害の問題に就いて、常置委員の名稱を濫用される、といふことは、甚だ迷惑でありますから、斯ういふことは、小さい問題のやうではありますが、將來の事もあるに依つて、此の際、常置委員諸君が、自分等の名譽を、維持する爲に、縣會

の役員の名を濫用した、といふことは、甚だ正くない行動と見るから、名稱濫用に就いて、謝罪をせられるのが至當であらう、と思ふ。併せて、今後も、斯樣な問題が、起きた時分に、常置委員諸君が、濫りに其の職名を以て、自分の信用を維持する、といふやうな、行動に出てられざらんことを、希望に堪へないのであります。依つて本員は、常置委員諸君が、速かに議場に向つて、謝罪せられんことを希望するのである』

九番の席に居つた、橋本近が立つて、頻に辯解を始めて、謝罪すべき性質の事柄でない、といふことを述べる。此時には、傍聽席から野次り始めて、議長の制止も、肯かぬやうな有樣に、なつて來た。

一

兒玉郡から選出された、持田直と、いふ人があつた。この人は、元來が、學校教員であつて、それから代言人の試驗を受けて及第して、兒玉郡では、唯一の代言人であつた、學校の先生を。長くして居た時分から、極めて穩かな、良い先生だ、といふので、評判が好かつたのみならず、此人の教へを受けてから、段々、世の中に、出て來た人も少くない。現に、刑事專門の辯護士として、令名の高い、卜部喜太郎の如きも、持田の教へを、受けた一人である。其の他此地方から出て來た、働き手は、大概、持田の教へを受けたのであつて、さういふ關係から、持田の信望は、存外に深かつたのである。古い自由黨員で、一と頃は活動したものだ。極落付いて居る、溫和しい人であるが、理窟を捏ね出すと、なか〳〵聽かないで、隨分、旋毛の曲つた、遣り方をすることもある。明治二十二年に、愛國公黨を、板垣伯が起した。それに對して、大井憲太郎が、再興自由黨を造つて、更に後藤伯の一派が、大同倶樂部を起した。それが三派鼎立の形で、盛に戰つたが、其際に、持田は、關東に於て、最も勢力の無い、愛國公黨を擔いで、大井派に反抗した事がある。大井派が、餘りに跋扈する、といふことが、癪に觸つて、それに、反抗の意味を以て、殊更に、愛國公黨を助けたのである。土地の利害に關係がある、といふ所から、開通問題に就いても、最初から、熱心な反對の一

人であつた。今、常置委員が、職名濫用の問題で、議場が、騷がしくなつて來た。此の機會に於て、持田は、突如として立上つた。

『議長、八番』

『八番』

『本員は、此の際、緊急動議を提出します』

斯うなると、傍聽席は、益々脈やかになつて來る。持田が、緊急動議で、何か知らぬが、問題を惹起す、といふのだから、唯譯もなく、聽いて居る者としては、此の位、面白いことは無い。

『本員は、此の際に於いて、常置委員諸君が、總て退席せられんことを希望する、といふ意味の決議をしたい、と思ひます。それは、何ういふ譯であるか、といへば、常置委員諸君の爲した行爲が、是非何れであるか、といふことを定める場合に於て、其の本人が、議席に連なつて居る、といふことは、甚だ穩かでない、と思ふ。斯く言へば、諸君は、必ず議事規則が無いから、といふことを、楯に取つて、抗辯せられるであらうが、それは苟くも政治家の一人として、縣治に携はつて居る以上、政治上の德義から考へて、自ら退席すべき者である、と考へる。然るに、諸君は、更に退席する、樣子も無く、平氣で、此の議席に居られる、といふのは、宜しくあるまい、と思ふから、本員は、改めて此の際に、常置委員諸君の、退席を促す意味の決議をしたい、と思ふ』

茲に於いて三十番の高橋莊右衞門が立つた。

『本員は、常置委員の一人として、唯今の持田君の動議に對して、反對いたします。其の理由は……』

『議長、八番』

『少し御待ちなさい』

『イヤ、待たれませぬ』

『議長、八番……議長、八番』
『唯今、三十番に、發言を許してあります』
『議長、八番、其發言を許したことが、間違つて居る、といふことに就いて、發言を求めるのです』
『唯今は、許しませぬ』
『議長、八番……これは、甚だ怪しからんことです。三十番に、發言を許した、といふことが、議長の誤りである、といふことを指摘しよう、といふ場合に、本員に對して、發言を許さぬといふことは、不法も甚しい。議長、本員は、改めて發言を求める。若し本員に、發言を許さぬならば、本員は、隨意に發言します』
『議場にあつては、議長の許さぬのに、發言は出來ませぬ』
『議長、其位のことは、我輩は法律家であるから、知つて居る。併しながら、不法に發言を許さぬ、といふ場合には、本員は國民の權利として、此の發言は、飽までも爲る積りであります。それに對して、議長が、如何なる方法を以て、發言を停止する積りですか。斯く相成る以上は、本員は、血を見るまでも發言を致します』
『ヒヤ〳〵』『大いにやるべし』『ノー〳〵、八番の方が、不法である』『默れ』『叱々、叱々』盛に騷ぎが、起つて來た。
持田は、奮然として、椅子の上に立上がつて、演說口調で、頻に發言をする。議場は騷然として、何時、治まりが付く、といふことも分らない。整理が覺束ない、と見たから、根岸議長は、直に鈴を振つて、一時休憩といふことにした。

三

一時の休憩はしたが、再び開く事は、困難であつた。頭數の上から言へば、一二名は不足であるが、非開通派の方は、喧嘩腰で、掛かつて來るのであるから、なか〳〵之を抑へる、といふことは難しい。殊に、常置委員の全部は、

開通派であるから、之に退席を命じて、決議をするとなれば、職名濫用に就て、何ういふ決議を爲れるか分らない。それが後の、開通問題に、影響をして來るのであるから、何うしても、開通派の議長たる、根岸は、容易に開會を、肯んじないので、空しく其日は、散會する事になつてしまつた。

サア斯うなると、縣の當事者が、心配を始めて、知事の內命に依り、各議員の間を奔走して、頻に調停に掛かつたが、容易に治まりが付かぬ。そこで、知事が、自身に、調停の勞を取る事となり、到頭、徹夜してしまつた。詰まり翌日の縣會に於いて、高橋荘右衞門が、一同を代表して、口頭で謝罪をするといふ事になつて、一時の治まりは付くことに內定したが、開通派の方が、斯ういふ穩かな、態度に出る、といふことは、甚だ弱いやうであつたが、實は、策戰の懸引から來たのであつて、斯んな詰まらぬ問題で、彼是騷ぎ立てゝ、それが爲に、開通派が、惡い評判を取るといふのは、面白くない。何うせ、議場に於いて、口頭で謝罪をする、といふ位の事は、何でもないのであるから、早く此の問題を片付けて、一瀉千里の勢ひを以て、開通問題も、片付けてしまはうではないか、といふことに、相談が極まつたのだ。

そこで、高橋から謝罪をする、といふことは、知事の注文であつたが、直にそれを容れて、翌日の縣會は、開會される事になつた。前の日の行掛りがあるから、傍聽席は、前日よりも、一層の賑ひであつた。

『議長、三十番』
高橋は、立上がつた。
『本員は、此の際に於て、議員諸君に一言いたします。本員等が、常置委員の名を以て、收賄云々の問題に就いて、新聞雜誌に取消を出した事は、職名濫用の嫌ひがある、といふて、昨日の議場で激しい御叱りを受けたが、退いて

考へて見るのに、如何にも、そんな傾きがあるやうにも思はれますから、改めて、本員は、茲に常置委員の名目を用ひて、取消文を出した一事は、甚だ輕卒であつた、といふことを、謝罪いたします』

と言うて、椅子に着いた。それと、同時に、持田が立上つて、

『議長、八番』

『八番』

『本員は唯今の高橋議員の謝罪せられた、言葉に就て、甚だ遺憾ながら、尚ほ一應、意見を述べなければならぬ。高橋議員は、悪かつたから、謝罪する、とは言うて居らない。悪かつたかも知れない、と言うて居るのだ。して見ると、謝罪の意志は、未だ無いものである、と考へる。唯、何かの事情から、一時、斯ういふことに依つて、此の問題を葬らう、とする考へから言はれたものだ、と思ふから、茲に改めて、斯の如き事柄に付いては、總代を以て謝罪する、といふ事は、悔悟の意が、十分に現れたものとして、認めることは出來ないのであるから、常置委員が、恐く起立して謝罪せられる、といふことが至當であらう、と思ふ。改めて此の事を、諸君に諸ります』

『ヒヤ〳〵』『賛成々々』といふ聲が起る。是から又騒ぎは大きくなつたが、兎に角、高橋が、一度、謝罪したのであるから、其の言廻しが強かつた、とか、弱かつた、とか、いふことは、別の問題として、謝罪しますといふ事は、確に言うたのであるから、今になつて、高橋一人ならば、宜しいが、常置委員一同が、立列んで謝罪する、といふことは出來ない、といふことは、何うしても理窟が許さないのであるから、到頭、常置委員が、『殘らず起立して謝罪する

といふ形式を執る事になつた。其時に、持田が、再び立上つて、

『議長、本員は、此際に於て、斯ういふ謝罪文案を起草いたしましたが、常置委員諸君の連名で、議事錄に、此の謝罪文を、留めることを希望いたします』

と言うて、直に謝罪文案を朗讀した。意外千萬にも、誰、口頭で詑る、といふやうな事が、斯ういふ場合に、なって

來たのは、洵に常置委員としては、迷惑千萬な事であつて、而も、持田が、曹いて來た、謝罪文案は、自分達が、悪い事をして居て、申譯が無い、といふやうな意味に、なつて居るのであるから、斯んなものを、縣會の議事錄に留める、といふことは、甚だ迷惑な次第であつて、何うしても、之を默つて居る、と云ふことは出來ない。そこで、反對論を提出する、事になり、之に對して、辯駁が起る、といふやうな譯で、其日は、大紛糾の裡に、散會する事になつた。

兎に角、斯ういふ事情で、縣會の閉會に當つて、非開通派は、取敢ず開通派に、一大痛棒を喰はした事になる。政治上の運動は、總て機先を制して、敵の出鼻を突いて行くのが、肝要なのである。

此の意味に於いて、非開通派は、第一着の勝利を得た。兩派の運動が、激しい爲に、今まで、浮腰になつて居た、議員の中で、何方へも附くことが出來ないで、極めて曖昧な態度を、取つて居る、一派が却て其の團結を固くするやうになつて、此の中立派の、起立の如何に依つて、開通派が、必ずしも勝利を得る、といふ事にはならなくなつた。

さういふ、曖昧な連中は、勢を見て喰付く、といふやうな傾きがあるから、先づ此場合には、非開通派の方へ、中立派は來るものと、一般の觀測は、さうなつて居たのである。斯ういふ變態が、起つて來るから、そこで、政治の運動は、面白味があるのである。

壯士と博徒

一

縣會議場の騷ぎは、前に述た通りであるが、外の方の騷ぎは、一層、激しくなつて來て、開通派の方では、關根と作田に、說き付けられて、一時は姿を匿して居た、玉金が、東京から、歸つて來て、頻に昔の緣故から、博徒を集めて、騷ぎ出した。それに、開通派の方には、壯士が無いのであるから、東京から、高い日當を拂つて、澤山の劍客を雇つて來る、といふやうな譯で、其事は、非開通派の方へも、響いて來るから、是は又、關根の顏で、頻に壯士を、連込んで來た。形勢は、時々刻々、險惡に、なつて行くので、浦和察警署では、多數の巡査を配置して、其の警戒は實に嚴重なものであつた。

非開通派の、重立ちたる者が、相談の結果として、兎に角、縣會に對して、開通費否決の建議書を出さう、といふ事になつた。それに就ては、多數の縣民から、調印を求めなければならぬ、となつて、其の運動をする爲に、關根は一時、本庄町へ、歸る事になつて、是から盛に、部下を督勵して、調印運動を始めた。

兒玉郡の旭村に、根岸丹次郎と、いふ者が居た。元來、利根川通ひの船乘を、渡世にして居て、學問は、固より無いが、小力があつて、容貌は、極めて凄味のある。斯ういふ運動に使ふのには、持つて來い、といふ、人物であつた。平生、關根が、目を掛けて居たので、それを引上て、此の運動をやらせる、といふ事になつた。態々關根が、訪

ねて行くと、折惡く不在で、母のおきく、といふのが居て、

『何か、旦那樣、伴に御用で、ございますか』

『ア、少し會つて、話をしなければ分らぬことぢやから、丹次郎君が歸つたら、僕の宅まで來て吳れるやうにして吳れ』

『承知いたしました。歸つて來ましたら、早速まゐるやうに致ます…』

『それぢや、お婆さん、僕は歸るから…』

『左樣でございますか、洵に失禮を致しました』

關根は、空しく本庄町へ歸らう、として、彼是、半里餘り、やつて來る、と、後から『オーイ〳〵』と、呼ぶ者があるので、足を止めて、振返ると、息を切つて、駈付けて來たのが、丹次郎であつた。

『オー、根岸ぢやないか』

『今、家へ歸つたら、母が、貴下の來られた、といふことを話しましたから、直に追掛けて來たのですが、全體、何ういふ御用なんです』

『外の事ぢやないが、今度の開通問題の一件だ』

『ハ、ー、成程』

『もう、普通の手段では、迚も勝利は覺束ないので、色々な事を始めたのだが、三萬圓の開通費を否決するやうに、縣會へ、建議書を提出したい、と思ふに就て、此の兒玉郡だけでも、全部の調印を纏めたい、と思つて、歸つて來たのだが、お前は、此の方面の調印を纏めて、それから、浦和の方へ、出て來て貰ひたいのだ』

『宜しうございますとも、そんな事は、何でもございません。私は、自分で判を集めて、それから行きませう』

『ぢや、何うか、さうして吳れ』

『嗟、それだけの御用ですか』

『イヤ、外にも用事はあるが、今から、話す譯にはいかぬ。何うせ、今度は、お前も、一年や二年は、喰らひ込む積で、出て來て吳れ』

『宜しうございますとも、監獄へ這入ること位、何でもございませんから、其の積で行きませう』

『ウム、お前は、洵に威勢が、好くて宜い。何時でも、お前と、話をして居ると、氣がスツとするやうだ』

關根は、散々、根岸に、油を掛けて、本庄町へ、引揚げて來た。

浦和の方では、段々、兩派の軋轢は、酷くなつて來て、關根との約束があるから、まさかに、玉金は、出て來られないが、其の代人として、田中廣吉といふ者が、大勢の博徒を率ゐて、出て來て居たのだ。是は昔、清水の次郎長の乾分で、名前は、餘り聞こえて居ないが、一と通りの理窟も言ふし、腕節も强い、博徒の阿兄分としては、巾は利くのだ。之に對して、非開通派の壯士は、關根や作田が率ゐて、衝突は、到る處に起きるから、浦和の人達は、一と通りの心配でなかつた。

非開通派の、委員の一人、鳥羽正時が、山口屋を出て、縣會へ行かう、とする途中、反對派の方で、鳥羽の顏を、知つて居た者がある、と見えて、折柄、田中が、率ゐて來た、一團の博徒と劍客が、互に目配せをする、と、鳥羽の前後左右から、取卷いてしまつた。事が、餘りの不意に起きたのと、對手が惡いので、流石の鳥羽も、聊か閉口の氣味であつたが、弱い毛振は、見せることは出來ない。

『何だ、君達は』

『貴樣は、本庄町の鳥羽だな』

『さうだ、我輩は、鳥羽正時だ』

『少し貴樣に、談じたい事があるから、我々の事務所まで、來て吳れ』

『何ういふ用事か知らぬが、今、行く譯にはならぬ。用事があるならば、何れ改めて行く。我輩はこれで失敬する』と言ひながら、押退けて行きかゝる。

『何をするんだ。貴樣の都合が惡くとも、俺の方では、今、用事がある、と言ふのに、强ひて逃げやう、とするのは怪しからぬ』

段々、聲は高くなり、調子は荒くなつて、今にも、毆り合が始まりさうだが、若し始めれば、鳥羽は、袋叩きになる外はない。所へ、折好く、駈付けて來たのが、五十嵐九十郎と、作田玄輔であつた。

二

兩人の來るのが、もう少し遲ければ、鳥羽は、酷い目に、遭ふ所であつた。作田が、浦和へ來たのは、昨今の事であるが、大概な者は、知つて居るのみならず、此の事件に、關係して居る者は、殊に、よく作田の顏は、覺えて居るされば、五十嵐と二人で、乘込んで來たのを見る、と、流石に、鳥羽を、押へて居た、手を放して、一同は、ヂツと、作田の方を見た。鳥羽は、地獄で佛、とも言ふべき、二人の來援に、力を得て、

『ヤアー、作田君か、五十嵐君も、來て吳れたな』

『ウム、五十嵐と、今途中で、君が捕つて居る、といふ事を聞いたから、それで、飛んで來たのだ。全體、此奴等は君を何うしよう、といふのか』

『何か知らぬが、我輩に用事があるから、一緒に來い、というて、無理に引張つて行かう、とするから、我輩は、拒んで居る所なんだ』

『何奴が、そんな事を爲るのか』

『此連中が、さう言ふのだ』

『フ、ム』

作田は、對手の方へ向直つて、

『全體、誰が鳥羽を、無理に引つ張つて行かう、と言ふのか、何んな偉い身分の奴でも、本人が否だ、と言つたら、それを、無理に連て行く、といふ事は、出來ない筈だ。況してや、貴樣等のやうな、數にも足らぬ、日傭取同樣な奴等が、何で、さういふ不法な事をするのか、其理由を聽かせろ』

何んな場合にも、攻勢を取つて、決して受太刀にならぬのが、作田の特色だ。對手も、斯ういふ調子に、呶鳴り付けられて見る、と、默つて居られないから、田中が進んで、

『そりやア、俺が、皆なに頼んで、腕を貸して貰つたんだ』

『フ、ム、貴樣は、何んてえ奴だ』

『俺は、田中廣吉、といふもんだ』

『ハ、ー玉金の家へ、此の頃來て居る。清水の次郎長の乾分であつた、といふなア、貴樣か』

『さうだ』

『其の田中が、何の權利を以て、鳥羽を、連れて行かう、といふのか』

『少し聽きてえ事があるから、一緒に來て貰ひたい、と、いふのだ』

『さうか、それで、無理に連れて行かう、とするのだな』

『マアー、そんな譯だ』

『そりやア、甚だ不都合ぢやないか。話があるから、來て貰ひたい、といふのは、貴樣等の方の希望であつて、行くと行かないのは、此方の權利だから、行くのが厭だ、と言つたら、それまでの事ぢやないか、それを、無理に連れて行かう、といふのか』

ヂリ〳〵と、理窟詰で、やつて來られては、迎も田中なんぞは、敵ふものぢやない。もう此の上は、腕力の外は無い、と、覺悟したから、

『一緒に來い、といふのに來ない、といふから、無理に連れて行かう、といふのだ。それが、何うしたツてんだ』

『こりやア、彌々怪しからんぞ。假令、役人と雖も、法律の手續に依るに非ずして、人を攫に連れて行く、といふことは出來ぬのだ。それを、博徒風情の者が、妄に人を連れて行かう、といふのは不都合千萬だ。若し本人が、強ひて行かぬ、と言つたら、何うする積りか』

『何うするも、斯うするも無い。さうなりや腕づくでも、連れて行くんだ』

『此奴ア、面白いぞ。腕づくでも、連れて行く、といふなら、此方も、腕づくで行かぬ、と言つたら、何うする』

『何を、生意氣な事を吐しやがる。貴樣のやうな青書生が、幾らヂタバタしたつて、腕づくで、連て行くから、左樣思へ』

『愉快、〳〵、天下の作田玄輔に向つて、それまでに、放言し得る、といふなア、流石に、次郎長の乾分だ。鳥羽は姑く差し措いて、我輩が對手になつてやる』

作田は、二足ばかり後へ退つて、身構へをした。田中の方でも、斯なつては今更、退くにも退かれない。從いて居る乾分も、それ〳〵に、得物を取直して、一つ間違へば、作田に、打つて掛らう、といふのだ。

所へ、急報を得て、關根が、駈け付けて來た。是は、田中とも一面識があつて、途中で會へば、挨拶する位の間柄には、なつて居るのだから『マー、俺に委せて吳れろ』といふので、割つて這入つた。相方の申條を、一と通り聽いて、關根が、

『無理かも知れないが、此の白い黑いは、必ず僕が附けるから、事務所まで、來て吳ぬか、往來中で、互に腕を振つた所で、甲斐もない事だから、兎に角、事務所まで、來て貰ひたいが、何うだらうか』

喧嘩腰で、斯う云ふのならば、行く事は出來ぬ、といふが、仲裁者が、さう言ふのだから、否とも云はれず、そこで、田中も、承知する事になつて、是から、關根事務所へやつて來た。

三

關根と作田の兩人が、諄々として、事件の成立から說いて、田中が、之に關係する事は、將來の爲に、甚だ不利である、といふて、話して見たり、又、道理の上から言うても、非開通派の方へ同意するのが、俠客を以て任ずる、博徒の本領であらう、といふやうな事も、解り易く、話し込んだ、元來、田中は、玉金との關係から、據所なく、賴まれて來たのであつて、自分達の、渡世の繩張爭ひとか、カスリの關係があるから、といふのでもなく、謂はゞ、政治上の問題で、其の眞相の如きは、よく解らないのであるから、膝詰になつて、段々、話し込まれて見る、と、田中は飽までも、自分の意地を通す、といふだけに、强い覺悟はなかつたのだ。『兎に角、一兩日は、考へさせて吳れ』と、いふので、田中は、一時、引取ることになつた。

斯うした、衝突は、一日に何度となくある。實際よりは、世間の評判の方が、强く響いてゆくから、兒玉郡の博徒でも、少し心のある者は、默つて引込んで居る事は、出來なくなつた。渡邊宗八、池田幸次郎などいふ、平生は、餘り人に喜ばれない連中であるが、斯ういふ時に、奉公振を、見せて置かなければ、事の無い時分に、幅を利かせることが出來ない、といふので、關根を當に、浦和へ、出て來る。從つて、其の部下に、屬して居る、無賴漢も、續々、詰掛けて來る、といふやうな譯で、浦和の町は、博徒、壯士、劍客、此の三種の運動員で、何處の宿屋にも混雜するほど、集まつて來た。警察の方でも、非常な覺悟を有つて、それに對する、警戒は、嚴しくするやうになつた。

たとへば、政治問題にもせよ、餘りに熱狂して、目指す對手を殺傷する、といふやうな事は、甚だ不穩の計畫であつて、固より奬勵す可き事ではないが、併し、一身の名利を擲つて、命賭けて爭ふといふ、其處に、大和魂の貴い、

所はある。此の意味から、考へて見る、と、必ずしも手を下す者ばかりが悪い、ともいへぬ。當の對手と目指された者にも、悪い點があるに違ひない。謂はゞ喧嘩両成敗として、見る可きだ。

）事は、埼玉縣に起きた、一小問題ではあるが、其爭ひの關係が、既に人を熱狂せしむるまでに、なつて居るのであるから、斯ういふ場合には、縣の當局者が、餘程注意して、問題の解決を、計らなければならない筈であるにも拘らず、一旦、原案として出した以上は、何處までも、遣つ付けやう、としたり、或は、其の問題を利用して、一部の議員が、私腹を肥す、といふやうな考へを、有つて居るのを、縣の當局者が、それを助けるが如き、態度を以て、縣會に臨んで來るから、そこで、不穩な計畫を、爲る者も出て來る。熊谷から、大宮へ通ずる、道路を開通する事は、其時に決しなければ、百年の後まで決し得ぬといふ問題でもなく、埼玉縣の利害に、どれ程の關係があるか。要するに大宮といふ、一地方を繁昌せしむるか、爲しめざるか、といふ、小さな關係ではないか。然るに、是だけの騷ぎを惹き起したのは、實に開通派が悪いのみならず、縣の當局者にも、其の責任はある。

恐る可き計畫

一

昔からの刺客に就て、考へて見ると、大概は、其の背後に、煽動する人が、附いて居るものだ。表面は、誰にも煽動されないで、一人の考へで、事を行つたやうに、見えて居ても、よく〳〵探つて見れば、何等かの法式を以て、必ず煽動して居る者がある。根岸丹次郎が、此の問題に就て、開通派の議員に、一大痛棒を喰はせよう、として、非常な決心をする、其の裏面にも、關根寅松が、あつたことは、固より言ふまでもない。關根が、何ういふ風にして、根岸を煽動したか、といふことを、明らかに言ふことは出來ない。けれども、關根が、根岸の背後に居た、といふことは、事實である。

明治二十四年の十二月十二日であつた。根岸は、五十嵐と、東京へ、出て來て、麴町區飯田町に在る、卜部喜太郎の事務所へ、やつて來たゝ卜部も、今は年を老つて、東京でも、刑事專門の辯護士として、天下に、令名を謠はれて居るが、其頃の卜部は、未だ代言人に、なつたばかりで、餘り重きを、なして居なかつた。

兩人が、どうして卜部の所へ、やつて來たか、といふと、五十嵐の弟に、犬三といふ者があつた。これは、有名な社會主義者、石川三四郎と、三人兄弟である。體格は小さく、色の白い、洵に美男子であつたが、頭腦は、非常に良く、何事に就ても、敏捷な質で、卜部も、犬三の將來には、望みを囑して居た。然るに、有つて生れた、美貌が害を

して、到頭、放蕩を始めてから、學業の方は追々後退りして、辯護士の試驗も、二三度は落第したので、終に斷念してしまつた。後年には、旭村の役場で、書記か何かになつて、淋しく暮して居る、と聞いたが、一時は、成金になつて、嫗殼町邊へ、頻に出入して居たといふ事だ。犬三が、此事件の時は、卜部の所に居た。其の上に、卜部が同じ村から出て居る、といふ關係で、此處へ、やつて來たのである。折柄卜部は、引受けた事件があつて、熊谷の裁判所へ、出張して居た時であつた。當時、卜部は、未だ無妻で居たから、萬事は、五十嵐の母が賴まれて、勝手元の事などは、取扱つて居て、事務の方は犬三が、一切を引受けて居たのだ。

九十郎は、犬三の兄であるから、何の遠慮もなく、すぐに打解けて、話をして居る中に、食事の用意が出來て、一ぱい飲みながら、夕食を終つた。それから、又一と頻りは浮世話に、花が咲いて、十二時頃になつてから、三人枕を並べて、眠りに就いた。

犬三は、國を出てから、一年餘りになるが、其の後は、一度も、旭村へは歸つて居ない。從つて、國許の事情には暗くなつて居た。此頃の新聞で見た、開通問題に就て、縣會が、騷いで居るといふ事であるから、兄が來たのを幸ひに、其の事情も、聞いて見よう、と思つて、頭を上げて見ると、九十郎は、未だ大きな眼を、パチ〳〵やつて居る。隣に寢て居る、根岸は、もう高鼾で、グウ〳〵やつて居る樣子だ。

『兄さん』

『未だ寢なかつたのか』

『エー、未だ眠れないのです。兄さんに、聽いて見たいことが、あるんですが』

『何だね』

『外でもないんですが、例の縣會の一條を、新聞でばかり見たのでは、其の實際が分らないのですが、全體何ういふ事に、なつて居るのですか』

『イヤ、もう、大い騷ぎさ。議員の頭數から言へば、開通派には、迚も敵はないのだが、今は、種々の手段で、外部から押付けて居るので、開通派も、思ふ通りには、事を行ひ得ないが、此四五日の間が、一番に大切な時であるから、何か、非常手段を以て、開通派を、ギヤフンとやらしてしまはなければ、非開通派の勝利は、覺束ないのだ』

『さうですか。そんな有樣に、なつて居るんですか』

『それに就て、お前に、少し聽きたい事がある。卜部先生は、何時頃に、歸つて來るだらう』

『明後日に、なりませう。今度の事件は、少し面倒だ、と言つて居たから、二三日は要かるでせう』

高鼾で、寢て居た、根岸は、ムツクリ頭を上げて、大きな欠伸をしながら、

『ヤー、五十嵐君、話し込んで居るな』

九十郎は、寢返りを打ちながら、

『君、眠が醒めたのか』

『醉醒の加減で、咽喉が渴いて、眠が醒めたんです。何か、面白い話が、始まつたんですか』

『ナーニ、別に面白い話、といふ事もないが、縣會の模樣を、話して居たのさ』

『さうですか、それぢや、一件を相談したんですか』

『未だ、其處までは、進んで居ないのだ』

『それぢや、早く相談して見たら、宜いでせう』

犬三は、兩人の話を、聽き咎めて、

『何か、僕に用があつて、來たんですか』

『ウム、實は少し相談したい事が、あるのだ』

『それは、何んな事なんですか』

九十郎は、何と思つたか、寢床の上へ、起き上つた。犬三も、之を見ると、同じく起直つて、九十郎と、差向ひになつた。根岸は、未だ横になつて、煙草を吹して居る。

一

九十郎は、聲をひそめて、

『お前に相談したい、といふのは、外の事でもないが、實は、今も話した通りの有樣で、何うしても、非常手段を行はなければ、駄目だ、と思ふが、それに就ては、根岸君が、兒玉郡の人民の犧牲となつて、何か、やつて見よう、といふ決心をして、出て來たのだが、僕の考へでは、斯んな小さな問題で、根岸君の、一生を葬つてしまふ、といふのも氣の毒であるから、同じ活劇は、やるにしても、成べく其の罪を輕く濟ませたい、と思ふのだ。それには、法律の關係を、少し調べて置いて、掛りたいと思つて、誰にも相談せず、兩人で、やつて來のだが、卜部先生が、御在在だ、といふのでは、お前に、相談する外は無いのだが、全體、何ういふ風の事をしたならば、反對の奴等の頭へ、ピーンと響いて、此方が、罰を受ける事が、輕く濟むだらうか。それを、研究して貰ひたいのだ』

此の相談には、犬三も、聊か驚いた。非常手段を行ふ、といふので、豫め法律から、研究して掛かる、といふのは隨分、蟲の良い話で、此の位、狡猾い遣方は無い。改めて相談されても、一寸、答へには困るが、併し、よく考へて見れば、土地の問題としては、利害の關係も大きいが、敢て是が、天下國家の大問題、といふではなし、此の位な事で、命を棄てさせる、といふのは、縱令、本人には、それだけの覺悟がある、にしても、可哀相な譯であるから、九十郎が、言ふ通り、少しでも輕く濟ませてやりたい、といふのは、人情の自然で、さうなくては叶はないが、差當つて、何ういふ風の事をやつたらば、此の位で濟む、と、豫め法律の關係を、明かに、言ふ次第にはならぬ。卜部先生が、居たにした所で、此の難問に對しては、答へは出來まい。自分としても、迂闊の返辭は、出來ない譯だ、今まで、

兩人の對話を、聽いて居た、根岸は、全體が、頓狂な奴だから、

『ネー、犬三君』

『何だい』

『人の腕か脚を、叩つ斬つたら、何の位で濟むだらう』

如何にも、其の質問が唐突で、殊に露骨なのには、犬三も、益々驚いた。

『そりやア君、不具にすれば無論、三年以上の刑は、受けなけりやならぬ』

『フム、極重くつて、幾ら位食ふね』

『サー、犯罪の狀況にも依り、又、裁判官の心證にも依つて、輕重の別はあるが、手や足を斬つて、不具にしたとか、眼を潰したとか、いふやうなのは、存外に輕くない、三年や四年は、食ふ覺悟が無ければ、出來まい』

『さうか、三年や四年で濟みやア、腕や脚の一本位、斬つても差支ないが、確に、それ位で濟まうか』

『そりやア、其の位の覺悟をして居れば、大丈夫だ。それ以上は、やられる氣遣ひはない。けれども、一口に、腕や脚の一本位、と、いふやうなものゝ、若し手當が遲れると、それが爲に死ぬ事もある。さうなれば、毆打致死というて、八年位は、食ふ事になるだらう』

根岸は、眼を丸うして、

『オー、そりやア高いな。三年か四年で濟ませたい、と思ふんだが、八年も、やられちや堪まらない。それ位なら、寧そ死刑に、なつちやつた方が、優しだ』

九十郎は、手を握つて、根岸を制した。

『大きな聲をするな。奥に寢て居るなア、母だから宜いやうなものゝ、併し、壁に耳といふ事も、あるから、そんな話は、小さな聲で、やつてくれ。全體、君は、高調子でいかぬよ』

九十郎に叱られて、根岸は、頭を搔きながら、

『氣に乘つて來たもんだから、聲が高くなつちやつた』

犬三は、暫く考へて居たが、

『ウム、宜い事がある。是なら無論、無罪で濟むのだらう。それで、對手は、大い痛傷を負うて苦しむ、といふ妙案がある』

『ハ、ー、そりやア、何ういふ事をすれば、宜いのか』

根岸は思はず、膝を進めた、

『そんな、巧い方法があるなら、直敎へて吳れ。明日にでも、やつつけてしまふから』

『マー、待ち給へ、そんなに、急いちやいかん』

『併し、犬三君、何ういふ事に、するのか』

『對手の奴の頭から、劇しい藥を、打掛けるんだな』

『フ、ム、藥を打掛けるていなア、何ういふ事を爲るのか』

『例へば、硫酸とか、鹽酸とか、いふやうな、劇藥を振掛ける。金や銀のやうなものでも解ける、といふ位に、劇しい力を、有つて居る、藥を掛けられたら、人間の肉や骨位は、溶けてしまふだらう』

『それならば、法律に引つ掛からないのか』

『マー、大丈夫だらう。法律にないのだから、確だと思ふ』

『全體、何ういふ譯で、さういふ事が、法律に書いてないか』

『それには、理由があるのだ。一應、其の理由を話さうか』

『ウン、聽かせて吳れ』

九十郎と、丹次郎は、膝を進めて、犬三の說明を聽くのであつた。

『英吉利の法律には、身體毀傷罪といふ箇條があつて、藥の力を用ひたり、其の他、理化學の作用で、人を傷つけた者を處罰する、制裁は設けてあるが、日本の刑法には、それが無いのだ。元來、法律思想が、極めて發達して居ない時代に、佛蘭西のボアソナード博士に就て、指圖を受けながら、拵へた法律だから、我が刑法の中には、不備の點は、是ればかりでなく、澤山にある。假令ば、無錢飲食といふやうな事が、詐欺取財の罪名に依つて、罰せられて居るのだ。是も、最初は、裁判官が、頗る苦しんだもので、無錢飲食が、詐欺取財といふのは、理窟から言つたら、實に變なものだが、さういふ事のある、といふのを、ボアソナードが、氣が付かないので、普通の詐僞取財のみを、規定して置て、無錢飲食が、あつた際、何の制條を當篏めたら、宜いか分らない。そこで、據所なく、無錢飲食に、判決例を作つて、それから後の、無錢飲食は、詐僞取財で、罰して居たのだ。

斯ういふ風に、刑法の制條には、澤山に不備の點があつて、毆打創傷罪といふ、箇條は設けられてあるが、理化學の作用、卽ち藥の力を藉りて、人に傷を付けたといふ事は、文字の意味から解釋して行つても、毆打にはならないのだ。流動物を、人の頭から掛けて、それが毆打といふ事は、理窟に當篏まらない。殊に、未だ日本には、さういふ事が無いから、判決例も、出來て居ない。從つて、硫酸や鹽酸の力を藉りて、人に傷を付ける、といふ事は、法律の制條にないのだから、無罪になるだらう、と思ふ。けれども、是から先、さういふ事が、續出すると困るから、裁判官が、判決例を作り、之を强ひて、毆打創傷罪の制條に、當篏めて行けば、罰せられる事になる。さうなつてからは、重くやられるか、輕くやられるか、といふ事は疑問であるが、マアー、さういふ場合には、多く輕く濟ませる、といふのが、慣例に、なつて居るから、一年か二年で濟むだらう、と思ふ。それだから、若し行るのならこれで、行つて見たらどうか』

法律の知識に乏しい、思想の無い、兩人は犬三から、此の講釋を聽いたので、非常に喜んだ。

それから、話が進んで、愈、硫酸か鹽酸を買込んで、それを、議員の頭から振掛けてやらう、といふ事に、相談の極まつたのが、もう夜の明ける頃であつた。

『オイ、犬三』

『何です』

『硫酸か鹽酸を買ふにしても、そんな、劇い藥は、なか〳〵普通では賣るまいが、そりやア、何うしたもんだらう』

『宜しい。それに就ては、僕の懇意な藥屋があるから、買取る事の出來るやうな、手續を聽いて來て、それから、外の藥屋で、買ふ事にしよう』

『それぢや、何うか、其の手續を、聽き出すだけは、お前に頼むから、早速に、やつて吳れ』

『宜しい、承知しました』

相談は、是で極まつて、是から三人は、面を洗つたり、食事をしたりして、一息した。其中に、犬三が、出て行つて、劇藥買入の手續を、すつかり敎はつて來たので、愈々、買入の手續きに掛つた。

斯ういふ次第から、劇藥を以て、反對の議員を、苦しめる事に極まつたのだが、犬三は、初めから關係は無かつたので、唯、法律の關係を、尋ねに來られたので、其說明をして聽かせた、といふ關係から、犬三も、到頭踏込で、其の實行に、與かる事に、なつたのだ。體も小さく、色の白い。何處となく、女好きのする、綺麗な男で、口數も餘り利かないが、犬三は、存外に、膽玉の据わつた男であるから、其處まで踏込んで、相談對手になつたのである。縱令、自分の實兄九十郎が、根岸を連れて來たにもせよ、犬三が、普通の書生なら、其處までは、踏込む筈がない。

根岸と九十郎は、卜部の事務所を、出掛けた。それから二人は、彼方此方と彷徨うて、藥屋の前へ來ては、這入らうとするが、偖て愈々となると、一寸、這入り難いもので、躊躇しては、通り過ぎてしまつた。何時か知ら、本鄕の眞砂町へ、出て來た。と見ばれ、向ふに大きな、藥屋が一軒あつた、屋根に上つて居る、招牌を見ると、蒼生堂とし

てある。何時まで躊躇しても結局は買はなければならぬのであるから、思ひ切つて、兩人は、ズツと、蒼生堂の店先に、這入つて來た。

三

工業用の、劇藥取締規則なるものはあつた、が、甚だ不完全なもので、何うかすると、間違ひが起り勝であつた。著者も、藥屋に生れたのであるから、多少は、其の道の事を、心得て居るが、

『私は、何町何丁目の何といふ者であるが、斯ういふ職業を、爲て居るに就て、斯ういふ藥を、買たいのである』と、言うて來られる、と、正式に、買入の書付を書いて、判を捺して吳れゝば、直に賣渡すやうに、なつて居るのだから、其の人が、果して其の町に、住んで居て、自分で、語るが如き、商賣をして居るか、何うかを突止めないでも、其の手續きさへ、正當に、出來て居れば、賣渡しても宜い、といふのが、劇藥取扱の規則であつた。それだから、嘘を言うて買へば、何程でも買取られるのだ。それで、若し間違ひが出來る、と、手續きは正式に踏んであつても、藥屋が、罰を受ける、といふやうな、馬鹿らしい事に、なつて居たのである。今では、斯ういふ取扱は、何ういふ風に、なつて居るか知らぬが、昔は、さういふ、馬鹿氣た事になつて居たのだ。

『お前さん所に、硫酸があるかね』

『ヘイ、ございます』

『よく利くのを、見せて貰ひたい』

此の尋ね方が、素人臭い。硫酸を買ひに來るのに『よく利くのを見せて吳れ』と、いふのは變だ、とは思つたが、藥屋の方では、商賣の事であるから、

『承知致しました。併し、藥用になさるので、ございますか、工業用になさるので、ございますか』

と言はれて、兩人は、返辭に困つた。工業用にするのでもなければ、藥用にするのでもなく、人間の頭から振掛けるのだから、何方が良いか、それは分らないのだ。根岸は、無頓着な男だから、

『そりやア、利目のある方を、見せて貰ひたい』

『へへー、利目と仰いましても、藥用に致すのと、工業用に致すのとは違ひますから、それで御尋ね致すのでございます』

『成程、工業用でも、藥用でも、それは構はないが、兎に角、振掛けて效能が、あるやうならば、それで宜いのだ』

『ハ、ー、振掛けると仰いますと、何ういふ事で、ございますか』

九十郎は驚いて、根岸の袖を、引つ張りながら、

『詰まり、利目があれば宜いのだから、工業用と、藥用とは、何方が高いのか、値段が分つて居れば、聽かせて貰ひたい』

『そりやア、工業用の方が、ズツと安うございます』

『幾ら位するものかね』

『全體、何の位、御入用なんで御座いますか』

サー、又息詰まつてしまつた。何の位入用なのか、そんな事は見當が付かないのだ。丹次郎は、九十郎から注意されたが、少しも感じない。

『五六人分だけ、買たいのだ』

藥屋は、怪訝な顏をして、

『へ、ー、五六人分と仰しやいますと』

九十郎は、又口を入れて、

『ナニ、此の人は、其の使ひ方を、よく知らないから、斯んな事を、言うて居るが、五六人の職人が使ふ、といふ意味なんだ』

『ハ、ー、さうでございますか、それぢや、職工用でございますな。一封度に就て、四錢位の品が、一番に賣行が宜しいのでございます。藥用の方になりますと、三十六錢位は、いたします』

もつと、高いものだと思つて居たら、存外に安いものだから、兩人は、顏を見合せて、四錢や五錢で、五六人の頭に、振り掛けるだけあれば、洵に安いものだ。安い香水を買つたつて、そんなに澤山は無からう、と思ひながら、

『一寸、それを見せて貰ひたい』

『藥用の方は、瓶詰になつて居りますが、工業用の方は、大きな瓶に、なつて居りますから、御入用だけを、分けて差上ます』

『利目に就ては、何方が强いのか』

『左樣でございます。そりやア、何うしても、職工用の方が、粗製ではございますけれども、金や銀なぞを鍍金するのにも、此の方を使ふのでございますから、工業用の方が、宜しうございます』

『さうか、それぢや、其の工業用を、一封度だけ貰ひたい』

『就きましては、御商賣は、何でございませうか』

『鍍職です』

『ハ、ア鍍屋さん――買入證は、御持參でございましたらうか』

『ハツ、此處に、持つて居る』

九十郎が差出した、買入證を、藥屋の主人が、取つて見ると『神田區三崎町五番地鍍職麻田鹿八』としてある。

『ヘイ、宜しうございます。此の前へ、硫酸一封度、但し工業用として買入れた、といふ事だけを、御書加へ下さい

まし』

『諾、筆を貸して呉れ、直書くから』

其處へ、買入證を入れて、一封度、四錢の硫酸を買つて、一二町は、無言で來たが、周圍を見廻してから、九十郎は、

『オイ、根岸、あんな時に、詰まらない事を、チョイ〳〵口出しをするなよ。貴樣が、何か言ふと、俺は、冷汗が出る』

『ハ、ア、拙かつたかな』

『拙いにも、巧いにも、貴樣が言ふ事は、丸でしようがない。マア、それでも、是が手に這入つて、結構だつた』

『併し、五十嵐君、隨分安いもんだね』

『ウム、一封度四錢なんだからな』

『四人に振掛けても、一人前が、一錢宛だね』

『マー、そんな譯だ』

『八人なら五厘宛で、用を達すのだ』

『斯んな安いもので、實行が出來るのなら、早くやりや宜かつた』

『イヤ、お前は、さういふ無邪氣な考へで居るが、何うして、普通ぢや、此の決心は出來まい。併し、兒玉郡の爲めだから、お前が犧牲になつて、本氣に、やつて呉れ』

『宜しい、そりやア、確にやります』

是から、卜部の事務所へ、歸つて來て、犬三にも、之を示して、竊に其の機會を、窺ふ事になつた。

本庄町民の憤起

一

浦和の方では、愈々、縣會の騷ぎが、酷くなつて來て、縣知事を首め、縣廳の連中が、調停の勞を、執つて見たけれども、遂に行はれないで、之が爲めに、縣會は、當分休會と、いふやうな、有樣であつた。本庄町から、選ばれた議員で、高橋周平と、いふ人があつた。何うも、高橋の態度が、曖昧だ、といふので、兒玉郡の有志が、非常に怒つて、最早、今日となつては、其の去就を確めるよりは、怪しいと思つた奴を、片端から打毆つてしまふのが、一番宜からう、となつて、既に其の準備に掛つた。取敢ず他郡の人に、手を着けるよりは、自分の郡から、出て居る議員を先に押へてしまへ、といふので、高橋に、狙ひをつけて、實行委員が、附廻して居る、と、いふ事が、何うして分つたか、高橋にも知れたから、こりやア一大事だ、愚圖々々して居る、と、打毆られるから、と、いふので、高橋は、或夜、密かに浦和町を、脫け出て、本庄町へ、歸つて來た。

そこで、本庄町の方へ、電報を打つて、高橋が、歸つた事を知らせたから、運動事務所では、直に高橋の所へ、談判員を差向けることになつて、町内の有志が、押掛けて行く。其の後から、野次馬が、殆んど二三百人も附いて、高橋の邸を取卷いて、ワイ〳〵騷いで居る。平生は、其の土地では、一二を爭ふ財産家で、隨分、幅を利かして居たが斯ういふ問題が起きたら、不斷、威張つて居るだけに、尙ほ一同の憎しみが、酷くなつて來て、未だ門を開けない中

から、石を投げ込む者もあつて、騒ぎは一と通りではない。

愈々、委員が、中へ這入つて、高橋に、面會を求めると、

『折角の御出でゝございますが、主人は、浦和の方へ、參つて居りまして、唯今、不在でございますから、何ういふ御用か、一應、伺ひ置きまして、彼方の方へ、申し遣はす事に致しませう』

『馬鹿な事を言ふな。浦和の方から、此方へ歸つた、といふ事は、今、通知があつたのだ。此の前の汽車で歸つた、といふ事は、明かになつて居るのだから、今日の場合、さういふ僞はりを言うて、逃げ隱れをする、と、却て主人の爲に好くなからう、と思ふから、是非取次だら、よからう』

『イエ、さう仰つしやいましても、實際、不在でございますから、致方がございませぬ』

押問答をして居る中に、表の方で、ワッ〳〵といふ、喊の聲が揚がる。委員が、振返つて見ると、意外にも、作田玄輔が、やつて來たのだ。

『オー、作田先生ですか』

『ウム』

『何うして、お出でになつたんです』

『實は、浦和に、詰めて居たんだが、此處の主人の、高橋といふ奴が、逃げ歸つた、といふ事が分つたので、兎に角我輩が、談判をしようと思つて、駈付けて來たのだ』

『そりやア、好い所へ、來て下さいました。今、此の雇人の言ふ所では、何うしても、主人は、家に居らぬ、と言ふのです』

『そりやア、怪しからん話だ。よし、我輩が代つて、談判するから、退き給へ』

そこで、委員と作田が、入替になつた。今の對話の中で、作田といふ名前を聞いたので、高橋の雇人は、益々慄へ

上がつて、何ういふ事に成行か、と、齒の根も合はない程になつて、慄へて居る。

『オイ、何うしても、主人は居らぬといふのか』

『ヘイ、浦和の方へ、行つて居りまして』

『よし、それならば、それでも宜いが、浦和は、何といふ宿屋へ、行つてるのだ。浦和へ、行つて居るといふのは、貴樣が言ふのであるから、確にさうである、と言ふならば、俺と一緒に、浦和に行け。若し、浦和に行つて見て、高橋が居らぬと、貴樣は助けぬぞ』

と言ひながら、雇人の手を持つて、グッと引立やうとした。

『一寸、御免下さいまし、そ、そ、そんな事を仰つても、私は、存じないのでありますから』

『存じないならば、何故、家に居らぬ、と言つたのか』

『ヘイ』

『ヘイぢやない、不埒な奴だ』

ビシヤリと、横面を、一つ張り付けた。並んで居つた、雇人は、バラ〳〵立上がつて、奥へ逃げ込む。表では、ワッ〳〵、と聲を揚げて、石を投込む者は、益々殖えて來る。段々騒ぎが、大きく、なるばかりだ。

所へ、訴へに依つて、巡査が、駈付けて來たので、漸く群集を制止したが、『高橋が出て、委員に面會した方が、却て穩かだらう』といふ、巡査の說諭で、高橋は、迷惑だとは思つたが、據ん所なく、出て來て、面會する事になつた。

そこで、作田が、膝を正して、嚴重な談判に及んだので、到頭、高橋は閉口して、當日は缺席する、といふ約束をした。作田は、斯ういふ談判には、慣れて居るから、

『宜しい、君が缺席する、といふならば、それで宜しいから、其の代り、此處に居らぬ事にしたら、宜からう。却て、此處に居る、と、一同の疑惑を招いて、何んな騒ぎが起こるか知れぬから、何處へでも、遠くへ行つてしまふ事に

したら、宜からう』

『さういふ事にしますから、何うか、穏かに願ひます』

『宜しい。君が何處へでも、行つてしまへば、僕の方でも、穏當な方法を以て、君の家を警戒する事にするから、安心し給へ』

『何うか、さういふ事に、願ひます』

『して、君は、何處へ、行く積りだ』

『直江津に、親類がありますから、其處へ、暫く身を隠す事に致します』

『フ、ム、直江津と云へば、越後だね。大層遠いが、却て遠い方が宜からう。それぢや、さうし給へ』

そこで、談判は結了して、高橋は、直江津まで逃げて行く事になつた。

二

其の後、縣會は、幾度か、騒擾の間に開會されて、開通費の問題に就いては、委員も選ばれ、それ〴〵調査の結果本會議へ、附す事となり、それが、十二月十四日の議場へ、提出される事になつた。外部の景氣から見れば、非開通派の方は、極めて勢力のあるやうに思はれるが、矢張り實際に於いては、開通派の方が、四五人の多數で、勝利を得さうに、なつて居るから、サアー、非開通派の委員が、其の前晩から掛けて、非常な盡力はしたが、此の瀬戸際に臨んでは、挽回すべき策も、盡き果てゝしまつたので、此の上は、一種の示威運動を以て、議事堂を包圍し、弱腰の議員を、脅迫する外は無い、といふ事に決して、關根は、本庄町へ、急に立歸る事になつた。

徹夜の奔走で、各委員は、半狂亂の體になつて、本庄町は言ふまでもなく、其の附近の町村へ向つても、盛に檄を飛ばして、十四日の午前五時の汽車で、浦和へ押出す、といふ事になつた。何の位の人が集まるかは、確實に分らな

いが、併し、委員の見込では、少くも二千人位の人數は、集まる見込で、俄に停車場の前へ、其の事務所のやうなものを造つて、驛長に、談判を開いて、特に客車を增させる手續きをした。本庄町は、全で正月と、盆と、大晦日と火事と、一つになつたやうな騒ぎであつた。

偖て、十四日の夜明方になると、委員の一人たる、橋本孝太郎は、町の中央に設けてある、火見櫓に上がつて、半鐘を打始めた。實彈は詰めてないが、短銃を放つて、盛に其の意氣を張る。同時に、委員が手分して、それ〴〵人を勸誘する、といふやうな譯で、僅か一時間ばかりの間に、停車場の前は、人で押返すやうに、なつてしまつた。何しろ十二月半の事であつて、其の寒さは一と通りではないから、諸處に焚火をして、之に當りながら、ワイ〳〵騒いで居る。何うしても、昔の百姓一揆としか思へない。そこで、關根は、驛長に面會して、

『昨夜から、段々、御願ひして置いた、汽車の都合は、好いでせうな』

『イヤ、それが、飛んだ行違ひになりまして、客車の都合が付かないのです』

『そりやア、怪しからんぢやないか。あれだけに、頼んで置いて、今になつて、客車の都合が付かない、と云ても、是だけの人數を、何うして浦和まで運ぶのです』

『御頼みに依つて、私の方では出來るだけ、手續をして見たのですが、何うしても、其の都合が付かない、といふのですから、致方がありませぬ。幾ら多數の方が御集まりになつても、乘れるだけ、乘つて戴いて、後の方は、次の汽車にでも、乘つて戴くの外は無いのです』

『そんな、馬鹿な事は出來ない。今朝の縣會へ、兒玉郡の盛衰に、拘る程の大問題が出て居る事は、君も、知つて居るでせう。其の縣會へ、傍聽に行くべく、支度をして來た、是だけの人數を、空しく焚火に、當らして置いて、浦和へ、連れて行かない、といふ事は出來ない。又、此の汽車に乘つて行かなければ、間に合はないのですから、何

とでもして、都合して貰はなければならぬ。愈々、君の方で、都合が付かぬ、といふなら、貨車でも宜しいから、付て呉れ給へ。荷物のやうに人間を、皆な詰込んで行かう、と思ふから、其の位の事は、承知が出來るでせう』

斯ういふ風に、手詰の談判をされるので、驛長も、殆んど困つてしまつた。最初は、高崎と、前橋の驛へ照會して客車を、多く繼なぐ事にしたが、其の中に、埼玉縣知事から、兩驛へ向つて、客車を增して、澤山の人を乘せる事は見合せて呉れろ、といふ依頼があつた。是は、治安を保つ上に於いて、止むを得ない、應急の手段ではあつたらうが兎に角、是だけの人數が、一時に浦和町へ、乘込んで來て、騷がれた日には、如何に警察が、全力を擧げて、防禦しても其の防ぎは付くものでないから、止むことを得ず、何でも、浦和へ來る事の出來ぬやうにしよう、といふので、斯ういふ方法を講じたのだ。併し、驛長の立場としては、本庄町の人に、憎まれるのは厭だから、客車は、何程でも繼ぎたいけれども、高崎、前橋の兩驛から、客車の連結をして呉れない以上、如何ともすることは出來ない。されば、といつて、其事實を打明ける事は出來ないから、關根に取詰められて、ギューギュー苦しんで居るのだ。所へ、本庄警察署の署長が、多くの巡査を連れて、やつて來た。平生は、十人か十五人の少人數で、やつて居る、警察署であるが、前の晩に、形勢が、分つて居たから、附近の警察署へ、電報を打つて、夜中に、巡査を集めて、既に五六十人の多數に、上つて居たのだ。それを率て、駈付けて來たのである。

三

驛長が、關根に責められて、弱つて居るのを見て、署長は、ズッと這入つて來た。

『ヤー、關根さん』

『オー、丁度、好い所だ。君、立會つて呉れ給へ』

『ハ、ア、何ですか』

『此の驛長は、甚だ怪しからん男で、其の顚末は、斯う〳〵いふ譯ですが、實に怪しからんぢやないか』

『フ、ム、そりやア、御困りでせう。併し、驛長が、客車の連結を、自由にする譯にも行かないのですから、そりやア、關根さん、貴下も、察して上げたら、宜いでせう』

『併し、一旦引受けたのだから、今更になつて、斯ういふ事を言うて、斷るのは不法だ、と思ふが、君は何う考へるか』

『サー、そりやア、一旦引受けても、要するに、高崎と前橋の驛で、實行して呉れなければ、此の驛長としては、何うする事も出來ないのであるから、マアー、仕方が無いでせう』

『宜しい。さういふ譯ならば、我輩は、手を引くが、併し、此處へ集まつた、二千人からの群集が、何ういふ事をするか、今後の事に就ては、我輩は、責任を負はないから、君方が、然るべく、此の結局を付けたまへ』

之を聞いて驚いたのは、署長と、驛長である。此の人數に、是れから、騷がれた日には、迚も堪まつたものぢやない。

『そりやア、關根君、いかぬよ。君が集めたのぢやから、君が、此の群集を解散させるとも、或は、他の方法を以て鎭撫するとも、そりやア、君に責任がある』

『イヤ、我輩には、責任が無い。驛長が、客車を增といふ事を請負つたから、縣會へ、傍聽に行きたい、と云ふ希望の者は、行つたら宜からう、と、いふだけの事を觸れたのであるから、今、客車が、急に連結する譯に行かない、といふ、驛長からの答を得ても、我輩には、今更、そんな馬鹿な事は言へないのだから、其の事情は、驛長から、群集に、話すが宜しい。それで肯かないで、群集が騷いだら、署長が、職權を以て解散を命ずるなり、何うなりしたら、宜からう。驛長が、我輩の希望通りの事をして居たけれども、群集が、騷いで困る、といふのならば、それは我輩に責任がある。けれども、驛長は、約束を果さない、其の結果として、群集が騷ぐ、といふ事に就ては、我

輩に責任は無い』

『併し、關根君、君が集めた、といふ點に就ては、責任がある』

『そりやア、無論ある。併し、其の集めたのは、騷ぐ爲めに集めたのでない。今後、此群集が騷ぐ、とすれば、驛長の違約に基づくのであるから、其の騷ぐ事に就いては、責任は無い』

其の中に、委員の或る者が、關根と驛長の押問答を、立聞きして居て、之を、それからそれへと傳へたので、サア一同が、承知しない。賃銀を拂つて乘らう、といふのに、其の乘客を乘せることが出來ぬ、といふやうな、不都合な停車場ならば、寧打壞してしまつた方が、宜からう、などといふ、過激なことを、言ふ者も出來て、早くも、高い所に上つて、演說めいた事をする者もあれば、それに相和して、喊の聲を揚げる、といふやうな譯で、大分騷がしくなつて來た。所へ、高崎發の汽車が、やつて來たから、停車場の構內に、集まつて居る、連中は、我勝に、改札口から押出して、プラットホームに集まつた。今、汽車が着いたならば乘込まう、といふので、各々身構へて居る、と、此停車場へ、當然、停車すべき筈の汽車は、更にそんな樣子は無く、多くの場合に、停車場へ近付いた時は、汽車は緩々するのが、作法になつて居るにも拘らず、其の汽車は、停車場に近付くと、急に速力をはやめて、停車場を、通り過ぎてしまつた。アレヨ〳〵と、手を擧げ、聲を揚げて、騷いで居たけれども、全速力同樣の速力で、馳て行く汽車は、如何ともすることは出來ない。見る〳〵中に、一抹の煙を遺して、汽車の影は、見えなくなつてしまつた。是は、豫て浦和の方から通知があつて、十分の打合せが、出來て居たので、本來は、此の停車場に、立寄るべき汽車であつたのだが、俄に停車をしない事にして、全速力で行過ぎてしまつたのだ。サア、斯うなつて見ると、群集は、愈憤激して『我々が、此處へ押掛けて居る、といふ爲に、停車すべき筈の汽車を、停車させない、といふに至つては、甚だ怪しからん事である。鐵道會社までが、閥通派の味方をするに至つては、最早許す事はならぬ』

と言つて、石を投込む者がある。氣逸の奴は、屋根に上がつて、瓦を剝る、といふやうな騷ぎで、到底、普通の方

法を以て、治める事は出來ない。關根は、群集の中に飛込んで、頻に之を制止するやうに、見せ掛けては居るが、其實は、煽動して居るのであるから、益々騷ぎが大きくなつて、彼處、此處に、巡査と人民の、毆り合が始まる。其の騷ぎは一と通りでない。

彼是して居る中に、段々、時刻が經つて、十一時過に、なつてしまつた。それでも、群集は、一人も立去らず、彌が上にも、人數は、殖えて來て、何時、此の騷ぎは、鎭まるか分らない、といふやうな事になつた。折柄、高崎行の汽車が、這入つて來た。ゾロ〳〵下りて來る、乘客の中に、作田玄輔が、這入つて居た。疾くも、それと認めた、二三の者が『作田君萬歲』と叫んだから、一同も、等しく手を拍ち、喊の聲を作つて、作田を歡迎する、といふ有樣だ。作田は、改札口から、群集の前へ來る、と、直に高い所へ上がつて、ズッと、群集を見下した。叱ッ〳〵といふ、制止の聲が掛かる、と、今まで騷いで居たのが、水を打つたやうに、靜になつてしまつた。

四

作田が、小高い所に上がつて、群集を見下ろしたのだから、無論、何か演說でも爲すのだらう、といふので、一同は、固唾を呑んで、待つて居る、と、軈て、作田は、

『諸君、諸君に、報告すべき事があるから、暫らく靜にして、聽き取つて貰ひたい。而して、其の事は、諸君の爲には非常な利益となるべき事であつて、頗る痛快を極めたる事件であるから、恐らく我輩が、今、此處へ馳け付けて來たに就ても、これ以上の土產は無からう、と思ふ。それが、何ういふ事であるかといふと、今朝の八時五十分、上野發の汽車中に於いて、閥通派の議員數名が、或る人の爲に、頭から硫酸を掛けられて、非常な負傷をした、といふ事件である。それに就て、尙ほ詳細の報告をしよう、と思ふから、暫く謹聽を願ひたい』

ワッと、一時に喊の聲が揚がる。

『諸君、暫く靜にし給へ。其の硫酸を掛けられた議員は、大久保巳之作、橋本近、伊古田豐三郎、井上誠一郎、高橋莊右衛門等の諸氏である』

又もや、喊の聲を揚げて、ワイ〳〵騷ぎ出した。

『何うです、面白い事になりましたな。何といふ大い事をやつたもんでせう』

『さうですな、何んな人だか知らないが、汽車の中へ這入つて、議員の頭から、劇藥を掛けるなどは、實に新發明ですな』

『オイ〳〵、靜にしないか。作田先生が、まだ何か言つてるぢやないか』

『ウム、成程、まだ何か言つてらア』

叱ッ〳〵と、制止する者があるので、再び靜になつた。作田は、一段と、聲を張上げて、

『彼等が、斯やうな危害を受けた、といふのは、要するに、自分共の私利私慾の爲に、縣費三萬圓を濫用しよう、とした、それが爲に、或る義人の怒りに觸れて、斯ういふ事に、なつたのである。硫酸を振掛けた、義人といふのは、果して、何人であるか、今、之を知ることは出來ない、といふのは、既に現場から其の義人は遁れて、行方が不明に、なつて居るのであるから、果して何處の何といふ人である、といふ事は、我輩も、知る事を得ないが、思ふに是は天の命を受けて、爲した所の、正義の働きである、といふ事だけは、言へるのである。縱令、縣會に於いては、僅の差で、敗けるかも知れないが、非開通派に對しては、斯の如く、天の援助がある、といふ事は、諸君の深く記憶しなければ、ならない所だらう、と思ふ。然る上は、諸君に於いても、今後、飽までも結束して、此事件の勝利を得るの考へを以て進まなければ、なるまい。縣會に於いて決議しても、更に之を內務省へ、擔ぎ出して、內務大臣の命令に依つて取消させる、といふ事も出來るのであるから、今日の縣會の結果は、何うならうとも、それ等に就ては、少しも顧慮する所なく、諸君は、益々、結束を固くして、本來の目的に向つて進行する事を、切に我輩は

勸告するのである。先づ取敢ず是だけの事を、報告して置きます』

下へ降りると、作田の左右から、ワッ〳〵言うて、大勢が取卷いて、忽ち胴上げを始めた。暫くは作田の身體は、人から人の手に移されて、鞠の如く、群衆の頭の上を、持廻られる、といふやうな譯であつた。

『オイ、作田君』

『イヤ、關根君か、何うだ、隨分、面白くなつたな』

『ウム、實に痛快だ。硫酸を打掛ける、とは、巧く考へたね。全體、そりやア、誰が、やつたのか』

『誰か分らぬ。議員の頭から、硫酸を振掛けて置いて、一同が、騷いで居る中に、汽車の窓から、飛出してしまつた、と、いふのだから、少しも分らない』

『さうか、鐵の棒や、ステッキも、大分古くなつたら、新式の硫酸振掛けなんぞは、頗る振つてるな』

『本當に、さうだ。併し、そりやア、法律家の尻押しがあるぞ』

『フ、ム、さうかな』

『さうだとも、法律家の尻押がなけりや、考への付く事ぢやない。日本の刑法には、毆打創傷罪と、いふものはあるが、硫酸を振掛たのが、果して毆打罪になるか、此奴ア、法律上の議論があるだらう、と思ふ。そんな事を考へて、誰か教へた奴が、あるのだらう。さうして見る、と、存外、非開通派に對しても、世間の同情は、あるに違ひないから、此の現狀で、尙ほ押進んで行つたならば、或は、我々の方の勝利になるかも知れないから、其處は、關根君、君に、責任があるのだから、大にやつたら宜からう』

『さうだな、こりやア面白くなつて來たぞ』

兩人が、頻に話して居る所へ、浦和の事務所から、電報が來た。開いて見ると「午前八時五十分、上野發の汽車中に於て、開通派の議員數名が、劇藥を振掛けられて、負傷をした爲に、縣會は休會となつて、今後、何時開會になる

か、今の所では、其見込みは付かぬ」といふ意味の事が、書いてあるから、關根は、高い所に立つて、此の電報の報告をした。集つて居た、連中も、硫酸一條を聞き、今又、縣會の体會になつた、といふ事を、聞いて見る、と、縱令浦和へ行けなかつたにもせよ、其の不平は、之で癒やすことが出來るのだから、屢々、萬歳を叫んで、一同は、狂喜の態であつた。

汽車中の兇行

一

明治二十四年の十二月十四日、根岸武香、高橋荘右衛門、井上誠一郎、橋本近、伊古田豐三郎、大久保巳之作の六人が、上野から、午前八時五十分の汽車に乘つて、是から浦和の縣會へ行かう、とするのだ。此日の縣會は、例の開通費の問題が出るのであるから、謂はゞ天下分目の關ヶ原の戰ひ、と同じ事だ。前の晩から東京へ出て來て、策戰計畫は、此六人の相談で、熟まつて居たのである。

其前から、停車場に來て、此の一行が來るのを、待受けて居たのが、根岸丹次郎、五十嵐九十郎、同じく犬三、渡邊鷲四郎の四人であつた。根岸等が、二等車に、這入るのを見る、と、直に後から、續いて這入つた。其の中に、汽車が、進行を始めたので、前後の扉の所に、二人づつ立つて居るのは、愈實行に着手した場合に、逃げる奴があつたら、之を押へやう、といふのであらう。汽車は、徐々に、進行を始めて、今、王子の停車場へ、近付いて來た時に丹次郎が、突然立上がつて「アッ煙突がッ」と、頓狂な聲で叫んだ。其の聲に驚かされて、一同が、等しく窓の方へ首を向ける、と、直に丹次郎は、懷へ入れて來た、例の硫酸の壜を取つて、先づ側に居た、大久保の頭から、タラタラと、硫酸を流した。俄に火を點けられたやうに熱くなつたので、大久保が、アッと叫んで、頭を押へて、立上る途端に、橋本の頭へも、振掛ける。忽ち車内は騷動になつた。丹次郎は、盛に硫酸の壜を、左右に振るから、其の滴

の掛かる者は、皆負傷する、といふやうな譯で、車中の混亂は、一と通りでない。

酸硫を、スッカリ撒き終ると、丹次郎は、悠然として、窓の硝子戸を開て、體を斜にして、飛出してしまつた。兎に角、進行して居る、汽車の窓から飛出すのだから、固より命賭であつた。何しろ、進行中の出來事であつて、何うする事も出來ず、硫酸を掛られた者は、其痛みに堪へずして、苦しんで居る。氣の毒なのは、偶然乘合はした、普通の乘客、二三の人までが、其の飛沫を受けて、飛んだ怪我をした、といふ事であるが、其中に、汽車は、王子の停車場へ着いた。

早速に、此のことを訴へたから、俄に騷ぎ出したが、渡邊と五十嵐兄弟は、悠々と、車を下りて、改札口から出ると、姿を隱してしまつた。警察官が來る、醫者が駈付ける、負傷者へ對する手當をする、といふ譯で、停車場の混雜は容易でない、大久保の負傷は、殊に甚だしいので、直に東京へ、送り還して、順天堂病院へ入れる。其他の人も微傷ではあるが、それ〴〵に手當をしなければならぬ。同時に、警察の方では、非常線を張つて、犯人の檢擧に掛かる、といふやうな譯で、警視廳へは、電報を以て急報したから、直に警部が、乘込んで來る。裁判所の方からは、檢事や豫審判事が、王子の警察署へ出張して、直に假豫審廷を、開く事になつた。

渡邊と、五十嵐兄弟は、一時、停車場を出て、隅の川の扇屋で、一ぱい飲んで、悠々と、停車場へ、引返して來たのは、東京へ歸らう、といふのだらうが、隨分、圖々しい事をやつたものだ。

『ア、、一寸、御待ちなさい』

二人が振返る、と、警部に巡査兩人が、後から追うて來たのだ。犬三は、

『何ですか』

『チト、貴方方に、御尋ねしたい事がありますが、貴方方は、今朝の八時五十分の、上野發の汽車に、乘つて、此處へ下車したのですか』

『さうです』

『二等車へ、御乘込でしたな』

『其の通りです』

『其の際に、何か乘組の乘客に對して、暴行を加へた者があつた事は御存じでせうな。其始末に就いて、御尋ねをしたい事がありますから、警察署まで、御同道を願ひたい』

『イヤ、そりやア、甚だ迷惑です……用事があるならば、更に參る事にしませう。チト東京へ急ぐ用事があつて、歸るのですから……』

『それは、御迷惑でもありませうが、さういふ車に乘合したのが、貴下方の不幸で、十分御察しは致すが、同道して下さい』

『同道して呉れ、といふのでは御斷りする外はない、それとも、我々に、犯罪の嫌疑があるから來い、といふのならば、法律の手續に依つて、拘引したら宜いでせう』

『イヤ、さういふ難しい、理窟話でなく、一寸、御一緒に御出でを、願ひたいのです』

『行く事が出來ない、といふのに、貴官の方で、無理に來い、といふのでは、此方は、拒む外はないのであるから、拘引の手續をする外は、ないでせう』

『宜しい。それなれば、改めて貴下方に對して、拘引する、と、いふ事を告げまする』

『宜しい、拘引狀を、お見せなさい』

『拘引狀は無い』

『それがなければ、拘引に應ずる事は出來ない』

『併し、差支ない』

『何故、差支へありませぬか』
『現行犯として、拘引します』
『コリヤア、怪しからん。今朝から、四時間も五時間も經つて、今に及んで拘引するのに、現行犯とは怪しからん』
『此の方では、さう認めるのですから、強ひて拒めば、止む事を得ないから、職權を以ても、連て行きますぞ』
是までに押問答はしたが、此れ以上は、致方が無いから、三人は、警察官に連られて、王子の警察署へ行く事になつた。

二

偖て、汽車の窓から飛出した、根岸丹次郎は、何うなつたであらうか。何處から何處までの間で飛出せば、危險であるとか、又危險でないとか、いふやうな見込は、固より付けてないのだ。唯、硫酸を振掛けるに就ては、王子までの間に實行する、と、いふだけを極めて、巧く行つたらば、直に窓から飛出す、と云ふだけが、相談の上で、極まつて居たのだ。若し、逃げるのを妨げる者があれば、三人が、力を合せて、押へる奴の邪魔をして、根岸を逃す、と、いふ事になつて居たのである。

幸にして、負傷者の手當や、其の他で、混雜して居たので、根岸は、何の妨げも受けずして、窓から飛出す事は出來た。所が、生憎に、飛出した場所が、沼であつたから、逆さに泥の中へ落ちたのだ。漸くの思ひで、這ひ上つたが光るものは、眼玉ばかりで、全身、泥塗れになつて、何うすることも出來ない。殊に、身體を打つたのか、方々痛くて、思ふやうに、駈ける事も出來ないので、其邊を、這ひ廻つて居る中に、小さい明家があるのを見たから、其緣の下へ這ひ込んで、暫く息を休めて居るうちに、段々、其事が傳はつて、捜索が、嚴重になつて來たから、晝間の中は迚も出る事は出來ない。夜になつたらば、出よう、と、いふので、元來が、暢氣な根岸であるから、到頭、緣の下で

寢てしまつた。

其附近の百姓が、仕事の都合で、此の明家の前で、休んで居ると、鼾が聞える。ハテ變な譯だ、斯んな空家で鼾の聞える、といふ譯はないが、偖ては此の頃、評判の泥棒が、晝間の骨休めに、此の邊で寢て居るのか、何はともあれ訴へるが宜からう、といふので、直に、其邊に、張番をして居た、巡査に訴へたから、直に、それからそれへ、と傳へて、澤山の巡査が、明家を、四方から取圍んで、捜索を始めた。心持よく寢て居た、根岸は、段々、周圍の騒ぎがヒドクなつて來るので、漸く眼が醒めて見る、と、意外にも、巡査や、附近の百姓に、包圍されて居るので、是れはもう迚もしやうがない、と、氣が付いたので、緣の下から、這ひ出して來た。見れば、全身、泥塗れになつて、眼ばかり、ピカ〳〵光らして居る。其の不思議な姿を、見た時には、思はず、一同は、目を見合した。兎に角、斯んな姿で、此の邊に居るのは、普通の者ではない。今朝の事件で、汽車の窓から、飛出した奴があるのだから、恐らく、其の者が、沼田の中へでも飛込んだのであらう、と、いふ鑑定は、洗石に、商賣柄、直付くから、其の場から、根岸を拘引して、王子の警察署へ、連て來た。

是より先、假豫審廷が開けて、渡邊や、五十嵐兄弟は、一と通りの訊問を受けて、假に留置されて居る時であつたから、其處へ、根岸が、連れて來られたので、直に訊問に掛つた。本人も、覺悟の上で來たのであるから、少しも包み隱さず、ありし次第を、悉く自白してしまつた。

そこで、段々、訊問して見ると、此四人が、共謀してやつた、と、いふ事は、縱令、他の三人の自白は無くとも、十分に推測は付くのだから、改めて、四人に、令狀を執行して、警視廳へ、護送する事になつた。

其朝、浦和の騒ぎは一段と、ひどかつた。硫酸事件が無くとも、今朝の縣會で、開通費の問題が、爭ひになる、といふので、相方の應援者は、山の如く、詰掛けて來て、其の混雜は、一と通でなく、此の瀨戸際にまで、迫つて來る、と、相方の議員を首め、其應援者は、眼の色まで變へて、騒いで居るのだ。何時、どんな騒ぎが、出來るかも知れな

い、といふので、銘々に、多少の用意は、爲て來て居る。

其中には、隨分珍談もあつた。非開通派の一人で、新井鬼司といふ者があつて、何ういふ了簡であつたか、拳銃を懷に入れて、やつて來たのだが、硫酸事件の報知がある、と、一時に、浦和の町は、引ッ繰返るやうな、騒ぎになつた。新井も、面白半分で、駈歩いて居る中に、懷裡の拳銃を落したら、彈が飛出した。それが爲に、自分の足を撃つて、怪我をした、と、いふやうな事もあつて、其滑稽さは、一と通りでなかつた。

縣會の方へも、此の事件が、傳はつて來たから、其處で、議長の根岸武香は、事變の爲に缺席をするし、重立ちた る議員が、皆缺席となつたのみならず、事柄が事柄だけに、普通の缺席とも違ふから、縣の當局者からも、一應の交渉があつて、縣會は休會することになつた。開通派の失望は、言ふまでも、ないが、非開通派の喜びは、又一段と深く、何處へ行つても、萬歳々々と叫んで、丸で狂氣のやうになつて、町の中を、押歩いて居るのは、悉く非開通派の人々であつた。

三

汽車の進行中に、議員の頭から、硫酸を振掛けるとは、隨分、奇拔な遣方で、其の以前に、例の無い事だ。縣會の上では、開通派と、非開通派の爭ひであるが、兩派に屬する、人物の政黨關係を、調べて見る、と、非開通派には、自由黨が多く、開通派には、改進黨が多い。從つて、是が一種の政黨の、爭ひの如くなつて來る。非開通派の、方で惡辣な方法を以て、向つて來る以上は、開通派に於ても、相當の對抗策を取る可きである、と、いふ事になつて、榊原健吉の門人で、水上專造といふ、劍客があつた。是が、存外に評判のある、所謂、劍術屋としては、人にも知られて居たのであるが、此の水上に、賴み込んで、榊原の門人を、浦和へ聘んで、非開通派の壯士に對して、飽までも爭ふ事になつた。所が、此秘密が、忽ち漏れた、といふのは、前にも、一寸、引合に出たが、例の、壯士の、武田東

一が、矢張り榊原の道場へ、稽古に行つた關係から、水上をよく、知て居たのだ。それが爲に、水上の埼玉行が、早く分つたので、武田は、直に水上を訪ねて、此の問題の經過を話して、斯やうな事に、榊原の門人が關係するのは、宜しくない、と、頻に說いたので、遂に水上は、埼玉行を、中止する事になつた。

斯んな事で、紛紜いて居る中に、縣會は、引續き開會される。非開通派は敗北して、開通派の勝利となつた、公平に言へば、非開通派が、唯兒玉郡だけの利害から打算して、開通問題に反對するのは、甚だ穩當を缺いて居たのだ。從つて、縣下を通じての同情は、餘り深くなかつた。唯、埼玉馬車鐵道會社の關係が、一つあつた爲に、開通派が、始終、受太刀になつて居たのは、止む事を得ない。

話は、硫酸事件に戻るが、段々、豫審の進行するに從つて、遂に本庄町の小林止藏が拘引される事になつた。さうすれば、無論、關根の身の上も、危いのであるから、何事にも、機敏の關根は、逸早くも、行方を暗ましてしまつた愈々、關根を、拘引する爲に、出張して見る、と、何處へ行つたか分らぬ、といふ。偖ては逃げられたか、と、是から關根の行方を、搜す事になつたが、何處に這入つたか、更に其行方は分らなかつた。

偖て、根岸丹次郎は、豫審の調べに移されて、自分の兇行顚末は自白するが、共犯者に對することは、一言半句も言はない。そこで、豫審判事は、丹次郎を、密室監禁にしてしまつた。重大な犯人が、どうしても、自白しない、と、密室へ監禁する、といふ事が、其頃は、盛に行はれた。是は、治罪法の上に於ても許してあつたのだから、敢て惡い、といふ譯ではないが、密室監禁なぞは、餘り手輕くやるべきことではない。よく〳〵の事情が無ければ、さういふ事をしては惡いのだ。要するに、一種の拷問であるから、豫審判事が、密室監禁に依つて、犯人の自白を求める、といふ事は、其判事の手腕が、十分でない、といふ事にもなる。

然し、此處分を受けると、被害人は、隨分、酷い苦しみをする。著者も、密室監禁とは、少し性質は違ふが、半年餘りの、獨房生活をやつた。四疊半の座敷に、たつた一人で、面會を差止められ、差入は、すべて許されぬし、朝か

ら晩まで、ボンヤリして居る、といふのは、打つたり、叩かれたりするよりは、痛苦を感ずることが、酷い。大概な者は氣が弱くなり、一日も早く、此の苦痛を免かれやう、として、不實の陳述を、爲ることが、往々にしてある。普通の獨房と違つて、密室監禁となれば、其痛苦は、一層に甚だしく、周圍には、全で建物が無く、一軒離れて、出來て居る、小さい室の四方に、高く塀を廻らして、遠くから獄吏が、監視して居るのだから、迚も堪まつたものぢやない。大概の奴は、是で閉口するのだ。

横濱の平沼專藏が、あれ程に、剛情な親爺であつたが、尾州家の騷動に關係して、僞證罪で打込まれた時、密室監禁を、一ヶ月やられたので、到頭詐欺の事實を自白して、有罪になつたと、いふやうな例もある。

四

丹次郎が、訊問を受けて居る間に、面白い事があつた。硫酸を買つた家が、何處であるか、といふことを、調べられた時分に、何うしても、それが分らない、といふので、本人を、警視廳の刑事が伴れて、藥屋を搜して歩く事になつた。

丹次郎は、東京の地理を知らず、五十嵐九十郎に連れられて、硫酸を買ひに行つたのだが、其家の名前も、覺えて居ないので、是だけは、正直に答へて居るが、藥屋が分らない。豫審判事は、犯人が、僞を言ふものとして、警視廳へ囑託して、硫酸の買先を、搜させる事にしたのだ。毎日のやうに、人力車に乘せられて、刑事が、二人附いて、東京中の、藥屋の前へ行つては、此の家か、それとも外か、と言うて、尋ねる。丹次郎は、首を捻つて、此處ではない、と答へるので、それから、それへと、藥屋の前に、車を止めては、此處か、何うか、といふて尋ねる。雲を摑むやうな、尋ね物で、買先の分る筈は無い。

斯んな事で、日を過ごす中に、本郷警察署の調べで、例の蒼生堂が、十二月の十二日に、硫酸を、一封度賣つて居

り、買手の人相が、丹次郎に、似て居る、といふので、蒼生堂の番頭を呼出して、丹次郎を見させると、確に此人に違ひない、といふた。そこで、五十嵐兄弟と、渡邊を隙見させたら、九十郎が、同伴であつた。といふ事が、明かになつた。茲に於て、硫酸買入は、九十郎と、丹次郎の二人である、といふ、證據が確實になつた。

何しろ、硫酸を、議員の頭から掛ける、といふやうな事は、餘程考へたのであらうが、普通の者には、考への及ばぬ所だ。それに就いては、卜部喜太郎の家に、一晩泊つて、それから、硫酸を買入れに行つた、といふ事實がある以上、何うしても、卜部が、關係して居るだらう、といふ事を考へて、卜部を拘引する事になつた。全體、世間に、名を知られて居る、辯護士を妄に拘引する事は大に慎むべきではあるが、其の時分には、未だ裁判所の、役人の頭が、其處までには、進んで居ないで、知名の人を拘引する事は、何でもない事のやうに思つて、一種の好奇心に騙られて名前の高い者を、連れて行く、といふやうな事は、流行つたものだ。

卜部が、其の當日に、能谷へ、行つて居たのは、當人の日誌を見ても分るし、能谷の裁判所へ、照會しても分るのだ。然るに、さういふ反證が、あるにも拘らず、無暗に、連れて行く、といふのは、甚だ怪しからぬ事ではあるが、縱令、其當日に、卜部が不在であつても、實は、卜部から、犬三に申付て、之を敎唆したものであらう、と、いふやうな、根據なき想像に依て、卜部を、拘引して調べやう、といふ事になつた。本人の卜部こそ、何れ程、迷惑であつたか分らない。

併しながら、卜部といふ男は、極めて物事に、熱する方で、癇癪を起す、と、隨分激しい事も、やり兼ない風があつた。日露の媾和談判時分にも、新富座の演說會場で、一番先に拘引されたのは、此の男で、東京の法曹社會でも風變りの男であつた。極めて人格の高い、立派な氣風を、有つて居るので、裁判所の信用も、今日では非常に厚いが兎に角、其の時分には、未だ書生肌が失せないで、何方かといへば、急進突飛の風があつたから、斯ういふ事件が、起きて來る、と、何うしても、嫌疑を受けるのは、止む事を得ない。それに、自分の鄕里の事件であつて、卜部も、

一兩度は、演說會へ行つて、過激の說を、吐いて來て居るし、旁々、役人の方から見れば、怪しいと思ふのも、或は無理でなかつたかも、知れない。

酒も、隨分飲むだが、存外に、篤學の人で、平生は、書物を放した事が無い。文章も、達者に書くし、議論も、筋が立つて居るし、何事に付ても、怯びれた振舞は、爲ない男であるから、國民黨へ這入つて、代議士に、なつた時分にも、政治上の運命は、定めし長からう、と思つて居たが、忽ちにして退いてしまつて、今では、代議士の競走もせず、一意專心、辯護士の業務に、勵んで居るやうであるが、斯んな男が、政黨社會から遠ざかるといふ事は、此意味に於ても、今の政黨社會が、人格の高い者を、容れる事の出來ない程に、狹い汚ないものである、といふ事の反證になると思ふ。兎に角、卜部は、立派な人物であつた。

須賀安

一

關根は、本庄町を逃げて、直に東京へ、這入つて來たのだ。其の頃、京橋の三十間堀二丁目に、吉野治三郎といふ者が居て、關根と、少し關係のあつた所から、暫く其處に、潛伏して居たが、其後の本庄町の事が、心配になる所から、此問題に就いて、最初から、本部のやうにして居た。例の諸七樓の主人、常木米太郎と、いふ人丈けに、自分の所在を、知らせて置いた。それから、連絡を取つて、同志との打合せは、十分に出來るやうに、なつて居たのである關根が、何ういふ譯で、斯ういふ風に、逃げて歩くのか、といふと、事件の成行を、よく見て、それから自首して出よう、といふのであつた。自分は、根岸を、煽動したには違ひないが、根岸の、自白の模樣に依つて、自分の陳述の仕樣もあるから、殊に、自分が、早く捉まると、關係の範圍も擴まるし、旁々、何うしても、自分は、緩くり捉まる方が、得策である、といふやうな考へから、斯うして、潛伏して居たのだ。

或日、常木が、訪ねて來たので、すぐに面會して其後の模樣を聽いて、段々、事件の成行も、分つて來た。

『斯うして、隱れて居るにしても、萬一の事があつてはならぬから、もう少し、都合の好い所に、隱れる事にしたら、何うですか』

『イヤ、常木君、それに就ては君にも、心配を掛けて居るのだが、何うも、巧い隱家が無いので、困つて居るのだ』

常木は、聲を潜めて、

『それぢや、斯うしたら何うです』

『ウム、何うするのかね』

『實は、私が、長い間取引して、私の家で、使ふ魚は、日本橋の魚河岸から、送つて貰つて居るのですが、貴下も、豫て御承知の通り、婿の彌七が、子供の時分から、奉公して居たのが、魚河岸の須賀安といふ問屋で、家の婿に來るに就いても、須賀安が、親元になつて來たやうな譯で、此の男は、なか〳〵義俠心の強い、マア一口に言へば、昔風の魚屋で、面白い氣象を、有つて居る男ですから、貴下さへ、差支が無ければ、須賀安に話して、魚河岸に隱れるやうな事にしたら、何うですか。彼處は、御承知の通り、朝から晩まで、ゴタ〳〵して居て、人の出入も、目の廻る程に激しく、日本橋區の眞中に、一廓別になつて、全く人情風俗の、違つて居る所ですから、寧ろいふ所に、隱れた方が宜しからう、と思ふ』

『そりや、さうかも知れない。何うも、此の頃、僕が、此處の家に居る事が、薄々分つたらう、と思はれるから、さういふ事にして貰ひたい。早速、相談して見て見れないか』

『宜しうございます。それぢや、直に是から行つて、相談して見ませう』

そこで、相談が極まつたから、常木は、直に魚河岸へ、やつて來て、須賀安を訪ねた。

須賀安は、本名を、松田安次郎というて、魚屋の仲間では、お女郎安と、綽名して居る位で、身幅の狹い、着物を着て、三尺帶を、尻の先に、チョイと結んで、ニヨロリ〳〵として、歩いて居るので、斯ういふ綽名が付いたのだが何處から何處まで、昔の魚屋風で、江戸時代の魚河岸には、斯ういふ人ばかりが居たのか、と思はれるやうな氣がする。常木は、須賀安を訪ねて、關根の事を、頼み込んだのだ。須賀安は、頻に頷きながら、常木の話を、聽いて居たが、

『へ、ー、さうすると、米さん、何かい、關根さんていなア、詰まり去年の暮、評判の高かつた、議員の頭から、硫酸を振掛たといふ、其人を煽動て、やらせた人なんだね』

『まア、さうです』

『そいつア、なか〳〵威勢の好い、面白い人だな。けれども、同類が、捉まつて居るのに、自分が、逃げて歩くッていなア、チット卑怯ぢやアねへか』

『イヤ、それに就いては、少し理由がある』

『何んな理由が、あるんだね』

『其人が、早く捉つてしまふ、と、なか〳〵方々へ、關係を及ぼすから、それで一時、事件が落着くまで、隱れて居ようといふのです』

『フ、ム、そうすると、何も卑怯で逃げて居る譯ぢやア、ないんだね』

『さうですとも、そんな卑怯な人ではない。そりやア、大丈夫だ』

須賀安は、漸く胸に落入つた、といふ態で、

『宜うがすとも、さういふ譯で、一時、隱れて居よう、といふんなら、外に居るよりやア、俺の内の二階に居りやア間違ひは無い。巡査なんぞが、何人來たつて、家の若い奴等が、表で頑張つてしまやア、一疋だつて足踏を、させるこッちやア無んだから、安心して、此方へお寄越しなせい』

『何うか、何分御願申す』

『宜うがすとも』

相談は、忽ち決して、是れから常木は、關根を、迎へに行く事になつた。

二

魚河岸の事だけは、幾ら説明しても、人が本當にしない位に、面白い組織に、なつて居るのだ。兎に角、東京中の人が、三度、口にする魚を、唯一ヶ所で、供給する、其の市場に、なつて居るだけに、朝晩、一切の繁昌は、迚も形容の仕様が、ない位である。流石は、生物を、商つて居るだけに、人間も、自ら活々として居る。昔は、人氣商賣を旨とする、藝人などが、初めて、江戸へ、乘込んで來て、此の魚河岸が、肩を入れる、と、入れないのとで、直に當り外れが、極つた位である。憎んだら、根こそぎに、叩き付けてしまはなければ、承知をせず、又引立てる、となつたらば、何んな方法を用ひても、物にしなければ止まない、といふやうな、氣風があつて、其處に、魚河岸の人氣の面白い點は、あつたのだ。淩澫として、威勢の好い、鯉のやうな氣分を有つて居たのが、江戸ッ子だ。其江戸ッ子の中にも、最も勢の好かつたものが、魚河岸の人である。

『ヤイ〳〵、其處へ行く、新しい盤臺、少し待て、ヤイ』

『何でい』

『何でい、ぢやねへ。薄ボンヤリして、歩いて居るねへ。斯んな勢の好い、鯛があるんだ。呉れてやるから、持つて行け』

『幾ら位するんだへ。』

『手前ア、間抜けだな。値段を聽いて、手を着けるやうな、ことぢや、良い物は貰へねいぜ。値段の押合をして居る中にやア、生物は腐つちまわア、愚圖々々言はねいで、持つて行きやがれ』

是が賣買の時の有様だ。何うしても、脇で聽いて居れば、喧嘩を振つ掛ける、としきや思へない。錢を出して買ふものに「持つて行きやがれ」と言ふのは、何ういふ譯か。大切な、得意を呼止めるに、「ボンヤリしねえで、早く持つ

て行け」なんぞは、頗る面白いぢやないか。

併し、江戸ッ子が、如何に威勢が好いことを、主として居たにもせよ。呉服屋とか、菓子屋が、斯んな事を言つたら、直に客と、喧嘩を始めて、其店は、一月經たない中に、人影を見ない事に、なるだらう。けれども、魚河岸だけは、是で、通つて居るのだ、今日のやうな時勢になつても、矢張り、そんな風があつて、朝一切り、榮えて居る、賣買の激しい時に、一寸、行つて覗いて見ると、昔の江戸の、魚河岸の氣分が、味はれる。

魚河岸氣質が、骨の髓まで、染み込んで居たのが、須賀安である。此人は、著者も、長く交際つて、よく知つて居るが、全く昔の魚河岸の人は、斯うであつたか、と、話をして居る中に、さういふ感じが、頭に浮いて來る位であつた。其後、子供が、悪い道樂を始めて、店も閉めてしまつて、魚河岸との關係は、絶つてしまつたかりでなく、寂しい終りを遂げた、とも聞いて居るが、實に愉快な人であつた。

警察の方では、なか〳〵苦心して、關根の行衛を、捜して居たのだ。けれども、神出鬼沒、其の尻尾を押へられないで、巧に逃げ廻られて、何うにも、仕様が無い。今は、豫審も、段々進行して、既に捉まつて居る者丈けは、何時決定しても宜いまでに、豫審は、運んで居るのだ、けれども、關根一人が、居らない爲に、其の決定を、する事も出來ないで、日一日と、日が延びて居るのである。そこで、檢事の方から、入釜しく、言うて來るので、警視廳は、大活動を始めて、段々、探つて見る、と、流石に商賣柄で、三十間堀の吉野へ、眼が着いた。直に手を入れて見る、と、もう其の時は、關根が、他處へ移つた時であつて、何うする事も出來ない。それから段々、探つて見る、と、本庄町の諸七樓の婿が、魚河岸から來て居る、といふ關係を、探り出して、偖ては、常木の周旋で、魚河岸へ、這入つたに違ひない、といふ、見込を付けて、須賀安の家は、警察の注意する所と、なつたのである。

二三度、須賀安の家へも、巡査が、戸口調査として、調に行つた。けれども、迚も近付かれない。普通の手段を以て、捜索をした所で、駄目である、といふのは、魚河岸が、極狹い所へ、無理に建てた、家が多いので、屋根から屋

根、窓から窓を、傳はつて歩けば、傘を翳さずに、雨が降る日でも、體を濡らさずに濟む、といふ位に、人家が櫛比して居る所であるから、拙な手の入方をすれば、直に逃げられてしまふ。

之に就て、警察の苦心は、一と通りでなかつた。又、外の場所なら、兎も角、殊に、魚河岸の人氣は、よく分つて居る。須賀安の家へ、巡査が踏込んで、騒ぎが始まつた、といふので、何百人といふ、若い奴が、鮪庖丁でも出して騒いだ日には、それこそ、治まりの付かぬ事になる。そこで、密に方法を講じて、須賀安の家宅捜索を、行ふ事に内決した。

三

魚河岸の朝は、丸で戰さのやうな騒ぎだ。水の使方が暴いので、往來は、クシャ〳〵して居る。到る所に、塵芥は堆く積まれて、異臭は、鼻を刺すやうであるが、流石に、商賣柄とて、鼻の神經も、鈍くなつて居るものか、更に臭さうな顏もして居ない。午前十時頃になる、と、それ〴〵に、魚の捌きも付いて、もう早い家では、錢勘定と、帳合に掛かつて居るのだ。今では、さうでもないやうであるが、其時分には、未だ貸借が、總て信用から、成立つて居て、書付一本取交はさないで、お互の帳面を當に、長い間の取引が、一文半錢の狂ひが無い、といふのは、此里ばかりである。

須賀安は、若い者を對手に、頻に算盤を彈いてゐる。處へ、巡査が二人、這入つて來た。疾くも、それを見て、須賀安は、ギョッと、したけれども、そんな態度は、色にも出さず、態と、素知らぬ顏で、算盤を彈いて居る。

『親方ッ』

『何でい』

『旦那方が來まして、何か、親方に用があるさうで、ございます』

『さうか、少し待つて呉れッて、さう言へ』

『デモ、大急ぎだつて、こつです』

『馬鹿な事を、吐かすねへ。外の土地とは違はア、此の河岸へ來て、今時分に、急ぎの用だなんて、そんな、半間な奴に、巡査が勤まるもんかい』

一喝されて、若い者は、店頭へ、出て行つた。是が、奥まつた座敷で、巡査の姿を、見ずに言ふのなら、格別の事だが、目と鼻の先に、立つて居る、巡査の姿を見ながら、聞えよがしに、言ふのだから面白い。兩人の巡査は、妙な顏をして居る、所へ、若い者が、やつて來て、

『今、親方ア、帳合をして居ますから、少し待つて、下せい』

『イヤ、さう猶豫をして居る事は、出來ないのぢや。主人に、此處へ、一寸來い、と、言うて呉れ』

『そんな事を言つたつて、親方ア、今、手を放せねへ、と、いふんですから、マア、此處で、待つて御居でなせえ』

巡査は、少し癪に觸つたものか、

『コラッ、何を、貴樣達は言ふか、本職が、用事がある、と、いふのぢやから、其の通りに、取次げば宜いのぢや』

『そんな事を言つたつて、今、取次いたばかりですから、何と言つたつて、無獸なこつてすから……』

『さうでもあらうが、もう一度、取次げ』

『お前さんも、分らねへ事を言ふな。同じ事は一つこつたア、といふ事を、知つて居るかい』

『何ぢや』

『何ぢやも、彼んぢやも、あるもんか、同じ事ア一つこつたてんだ。一遍取次いで、いけねへことア、何度取次いだつて、同じことだ。そんなことア、火事早い江戸に、育つた者でなくとも、分らなきアならねへ筈だ』

筆を執らせたら、自分の名前さへ、書くことの出來ない、若い奴等が、存外に、自分の權利を、主張するに就いて

は、頑強な所がある。其處に、江戸ッ子の魂はあるのだ。親方に、劍突を食つて、小癪に障つて居る所へ、巡査が、權柄づくに言ふから、反抗の氣が起つたのだ。又、此若い者の身に、取つて見れば、誰よりも、親方が大切なので、親方の命令は、神樣に言ひ付かつたよりも、大切に守るのが、此の連中の習慣のやうに、なつて居るのだ。其處に、主從の美しい點は、現はれて居るのである。

『何うしても、貴樣は、取次が出來ぬ、と言ふのか、コラッ』

と、一喝しながら、若い者の、右の肩へ、手を掛けた。

『何を、しやアがるんでい』

と言ひながら、其の手を拂つて、立上つた。

『オヤッ、貴樣は、本職に抵抗するのか』

『何だか知らねへが、言ふことア肯けへんだ』

『何ぢや、不埒な事を申すと、許さぬぞ』

『俺にやア、取次げねへんだから、後は、勝手にしやアがれ』

頻に爭つて居る、後の方で、板臺を洗つて居た、若い奴が、井戸から、汲上げた水を、思ひ切つて、板臺の上へ、ザブッと掛けたから、其の餘勢が、逃げつて、巡査の袴も靴も、濡らしてしまつた。ワッと言つて、飛上がつた巡査は、振返つて見る、と、若い奴は濟まして、板臺を洗つて居る。

『これッ、貴樣は、本職に、水を掛けて、默つて居る、といふ法があるか』

若い奴は、靜に振返つて、

『エッ、水が掛かつたッて、さうかい、そいつは濟まなかつた。勘辨しておくんなせい』

チョッと、頭を下げて、斯う言つた切り、他方を向いて、濟まして、板臺を洗つて居る。此河岸へ這入つちや、役

人の權威も、猫の尻尾程に、効能が無いのだ。

四

須賀安は、悠々緩々と、帳面を控へて、算盤を、彈いて居る。店先の騒ぎは、追々、大きくなつて來る。其うちに、須賀安の家へ、巡査が這入つて、何か亂暴をして居る。といふ、噂が傳はつたから、サア堪まらない。喧嘩の中から、生れて、喧嘩の中で死にたい、と、いふ事を、心願に掛けて居る、若い奴等が、各得物を持つて、飛込んで來た。

『何だ〳〵、何が始まつたんだ』

『イヤ、皆、來て呉れたな』

『何うしたんだ』

『何うにも、斯うにも、斯んな分らねへ、巡査が、江戸の眞中に居るんだから、呆れ返つちやつた』

『フ、ム、何んな分らねへ事を、言つてるんだ』

『何だか知らねへが、親方に用がある、と言つたから、取次いだら、親方の言ふにやア、今時分、此處へ來て、そんな事を言つたつて、獸目だから、帳合が濟むまで、待たせて置け、といふから、俺も仕樣がねへから、其の通りに取次いだら、此巡査達ヤ、それが不都合だ、と言つて、俺を威かすので、俺も、癪に觸るから、取次がねへ、と言つて、頑張つて居る、と、今、政の野郎が、水を掛けた、とか掛けねへ、とか言つて、今度は、喧嘩が、其方へ廻つてしまつたんだ』

『フ、ム、そいつア、面白いな。其水ッていなア、頭から掛けたのか、尻から掛けたのか、何處から掛けたんだ』

『ナニ、袴が少しばかり、濡れただけのこつたア』

『フン、そんなこつて、怒つてるのか。寳前に、河岸へ、やつて來て、水の掛かつた位の事で、愚圖々々云ふのア、

權現樣此來、開けて居る、魚河岸の作法を知らねへ巡査だ。そんな者が、人民の取締なんざア、出來るもんぢやねへ。水を使ふのを、半分、商賣にして居る、魚屋へ、朝つぱらから、やつて來て、水が掛つたとか、何とか言つて御詫を吐くやうな奴は、毆してしまへ』

『遣付けろ〳〵』

藁を束ねて、投げる奴がある。態々、柄杓に、水を汲んで來て、パッと、巡査の頭から、掛ける奴もある。其亂暴は一と通りでない。もう、巡査も、勘忍袋の緒が切れたから、

『貴樣達は、怪しからん事をする、と、肯かぬぞ』

『何を、吐かしやアがる』

と、長い棒で、巡査の後から突いた。帽子は、向ふへ飛んで、板の間の滑に辷つて、尻餅を搗いた。わッと、喊の聲を揚げて、はやし立てる。

同じやうに、やつて來て、脇に、隱れて居た、四五人の巡査が、それへ現れる、と、後から警部が、附いて來る。それを見て、『サアー加勢が來たぞ』と、誰か知らぬが、言ふ者がある、と、それから、集つて來た、若い奴等が、ワッショイ〳〵と、押返すものだから、何うにも、斯うにも、手の着けやうが無い。それを見て、須賀安は、漸く奥から、ノソ〳〵出て來た。

『何か御用で、ございますか。俺が、須賀安といふ奴で、ごぜへますが、今、帳合をして居たんで、ツイ遲くなりました』

混雜の中を押分けて、警部は、それへ進んだ。

『お前は、松田安次郎と、いふのか』

『さうでございます』

『お前の家に、關根といふ者が居るぢやらう』

『へ、ー、關根ッて、そりやア、何んな人で、ごぜへやす』

『イヤ、お前の家に、關根といふ者が、居る筈ぢや』

『少し待つて、おくんなせへ』

と言ひながら、須賀安は、脇の方を向いて、

『ヤイ〳〵誰か居ねへか』

『ヘイ、親方、御用ですか』

『家の者で、誰か、關根ッてへ、苗字の奴ア居ねへか』

『そんな、詰まらねへ名前の奴は、居ませんよ』

須賀安は笑ひながら、警部の方へ向直つて、

『そんな、詰まらねへ名前の者ア、居ねいさうで、ございますよ』

警部は、可笑くはあるし、癪には觸るし、聊か言葉も、激して來る。

『お前の家の、雇人ではない。埼玉縣から、關根といふ者が來て、お前の家に、隱れて居るぢやらう、と言ふのぢや分らぬのか』

『戲談、言つちやいけません。俺の家は、魚屋なんですから、人を隱して置くやうな、そんな、廣い座敷は、一間もありやアしねえ。嘘だと思ふなら上がつて、お捜しなせへまし』

『ウム、よし。それでは、是から家宅捜索をするから……』

『オット、待つておくんなせへ。そんな、難しいことア解らねへが、何うするんです』

『家捜しをするのじや』

『アッ、さうか。そんなら宜いから、上がつておくんなさい』

最前からの押合で、二階に隠れて居た、關根は、此押問答が、手に取るやうに、聞えて居るのだ。又、それが聞えるやうに皆が騒ぐのであるから、其の中に、關根は、窓から這ひ出して、隣の家を籠抜けに、何處ともなく逃げてしまつた。そんな事を知らずに、警部は、是から家捜しなんて、騒いで居るのだ。何處まで、半間に出來て居るのか、分らない。

五

大騒ぎをやつて、須賀安の家宅捜索は、したけれども、關根らしい者の影も、見ることは出來ない。併し、確に居ると、目星を付けて居たのであるから、最前からの押合で、何處かへ逃がしたものだ、といふので、取敢ず須賀安は警察署へ拘引されて、再三の調べは受けたが、知らぬ、存ぜぬの一點張で、突張つて居るのだから、何うにも仕様がない。威かしや、慫しの利くものなら、其逆手を用ひて調べる事もあるが、此連中には、そんな事は、更に利目は無いのだから、據なく須賀安には、歸宅を許すことになつた。

須賀安の、家を遁れた、關根は、濱町の吉野屋と、いふのへ、やつて來て、暫く隠れて居たが、魚河岸の一條以來警察署の捜索は、一層嚴重になつたから、此處にも、長く足を止めることは出來ないで、何處かへ一時、高飛をしよう、と考へて居た、所へ、浦和から、高橋安爾が、訪ねて來た。それは、須賀安でも、一度會ふたから、諸七樓の主人に會うて、此處に居る事が分つて、訪ねて來たのだが、高橋の後から、密に巡査が、附いて來た事は、高橋も、知らなかつたのだ。關根と、暫く話をして、歸つて行つた、其後へ、巡査が乘込んで、遂に關根は、捕へられた。

もう、斯うなつては仕方がないから、關根も觀念して、潔く拘引に應ずる。此の事件に、先づ見込を付けられた者だけは、是で一同、押へられた譯だ。

監獄へ移されてから、面白い話は、小林止藏が、這入つて居た、監へ、何う間違つたのか、關根が、入れられたのだ。全體、共犯者を、一つ部屋に入れるなぞ、と、いふ事は、あるべき事でないが、何か、監獄の手續の上で、行違ひがあつたものと見えて、關根を入れたから、小林も驚いて、

『ヤア、關根さんですか』

『オー、小林君か』

『何ういふ譯で、貴下は、此處へ、這入つて來たんですか』

關根は、手を振つて、

『叱々、靜にしろ。大方、間違へて入れたんだらうから、今に、出しに來るに違ひない。よく打合はせを、して置かうぢやないか』

それから、小林と、兩人は寢込んだ。彼是、一時間餘り經つたのだから、其間に、關根と小林の間では、すつかり豫審の訊問に對する、答辯の打合せが、出來てしまつたのだ。是ぢや、關根を、無罪にする爲に、連れて來たやうなもので、監獄の間抜さ加減は、堪まつたものでない、漸く監獄の方でも、それと氣が付いて、初めて關根を呼出して又、外の監へ移させる、といふやうな、滑稽もあつたのだ。

彼是する中に、豫審は決定して、明治二十五年の十二月になつてから、裁判を開く事になつた。曩に拘引された、卜部は、關根、小林、渡邊なぞと共に、免訴放免されて、公判へ移されたのは、根岸丹次郎、五十嵐兄弟の三人であつたが、第一審では、根岸が三年の重禁錮、九十郎が二年三ケ月、犬三が一年、といふ判決であつた。それに一同、不服で控訴すると、二十六年の三月二十三日の判決で、犬三は無罪になつて、丹次郎と九十郎だけが、原裁判を認められて、石川島へ送られた。

是で、此事件の大體は終り、となつたが、前に、犬三が考へた、身體毀傷罪といふ、箇條が無いから、硫酸を振掛

けたのは、罪の問ふべきものは無い、と、いふので、無罪になる、といふ鑑定は破れて、茲に一つの、判決例が出來た。而も、其の罪名が、毆打創傷罪と、いふのだから、可怪いぢやないか。毆打といへば、讀んで字の如く、何か形のあるもので毆つたから、毆打になるんだ。それが、流動體の藥を振掛けたのが、毆打罪といふのだから、變なものではあるが、若し、法律が不備である、といふ爲に、此事件を無罪にしたならば、斯んな事は、到る處に流行つて、何うにも押へがつかなくなるだらう。餘程、裁判官も、苦しんだやうであつたが、到頭、毆打創傷罪に當篏める、といふ事になつて、斯ういふ判決を下したのである、それにしても、犬三が無罪になつたのは、全く拾ひ物を、したやうなものだ。

終末の悲劇

一

硫酸事件の大體は、既に述べ終つたが、偖て、作田玄輔の成行は、何うなつたであらうか。それを述べる事にしやう。

硫酸振掛の一條から、縣會は、一時休會をしたが、其の中に、負傷した者は、繃帶の儘出られる、といふので、縣會は、再び開會される。男振が好いといふので、金持の娘に、惚れられて婿になつた、大久保已之作も、折角の美貌を傷つけられて、白い布で、繃帶して、出て來たのは、何となくいぢらしかつた、といふ事である。橋本近の顏に三本筋が付いたなどは、馬車鐵道の事件から、斯ういふ事になつたのだから、飛んだ所に、軌條が敷けた、とすれば、諦めも付くだらうが、兎に角、縣會の大勢は、開通派に有利となつて、肝腎の反對運動をする、骨のある連中は、多く押へられてしまつて、其他の者は、嫌疑を受ける事を恐れて、閉塞してしまつたから、初の騒ぎが、大かつたに引換へて、縣會では、遂に開通派が、大多數を以て、勝利を得る事になつた。長い間、行悩んで居た、熊谷から寄居町を經て、大宮に達する、新道は、開通される事になつたのである。

獨り取殘された、作田は、非常に、憤慨して、頻に演說會を、開いて反對もする。其他、種々の事を行つて刺戟を與へたが、更に其甲斐も無く、縣會は、斯ういふ風に、味方の敗北と、なつてしまつた。議場へまで行つて、騒いで

見たけれども、多數の巡査と、反對黨に壓せられて、作田は、議場外へ、拉つし去られた、といふやうな譯で、今更に、手の着けやうがない。それにしても、味方の議員の、腰の弱さには、腕を擦つて、慨憤の氣を洩らすばかりであつた。

其時分から、作田の頭が、少し變に、なつて來て、動もすると、慷慨悲憤して、人の見て居る前でも、大聲を揚げて、泣くやうなことがあつた。維新前に、高山彦九郎が、勤王論の爲に熱狂して、動もすれば、常規を外れた行ひをしたと、いふ、それにも似て、今のやうな、世の狀態では、迚も正義の叫びでは通らない。權勢と黄金の力に依つてなせば、如何なる無理も通る、といふやうな、斯んな汚らしい、世の中には、生きて居る甲斐が無い、と、口走る事もあつて、同志の者も、頻に心配して、其の氣を鎭めよう、とするけれども甲斐は無かつた。

妹のお島が、遙々、訪ねて來て、頻に兄を慰めたが、玄輔は、腐敗した世を嘆き、輕薄な人情を罵しつて、果は、皿、小鉢などを擲つて、獨、憤慨の氣を洩らすやうになつた。此の調子では、何か間違ひでもする、といけないといふので、お島は、强ひて東京へ、連れて歸らう、としたが、玄輔は、なか〳〵肯かない。兎に角、相談は、明日の事にしよう、と、いふので、兩人は、枕を並べて、寢てしまつた。夜が明けて、氣が付くと、玄輔の姿が見えない、それから騷ぎになつて、川上に知らせる、と、早速、參三郎も、やつて來て、何處へ行つたらう、といふので、それぞれ手分けをして捜したが、遂に分らない。

然るに、玄輔の、脱いで行つた、着物の袂から、揉みくちやになつた、紙が出てきて、何か認めてあるから、お島が、開いて見ると、

世俗頽廢、人情輕薄、天下、殆んど清流の士無し。
奸詐欺罔、不義惡德、世人、殆んど之を恥づるなし。
法律の力、普きが如くして、普からず。道德の制裁は、遂に其の髮をだに見ず。

政友諸君、今や我、去つて之く所を知らず、諸君、幸に邦家の爲に自愛せよ。

と、書いてあつた。悲觀して見れば、一種の書置のやうなものである。そこで、益々〳〵、友人も、心配して居る、と、昨夜の終列車で、浦和と大宮の間に、轢死者があつて、それが、頭も體も、粉碎されて居て、殆んど形も、見えない程になつて居るが、壯士風の人であるといふ事が、評判になつた。若しや、と思うて、お島を首め、友人が、駈け付けて見る、と、是は、玄輔に違ひない。着物の縞柄や、穿いて居た、下駄や、其の他の物に依つて、さう認めることが出來た。そこで、檢屍を經て、愈々、川上が、之を引取つて、葬る事にした。

一代の快男兒、其の活躍をした、範圍は狹かつたが、二十七年の一生を通じて、唯、自分の思ふが儘に振舞ひ、其間に少しの情實や、私怨の干渉を受けず、自己の信念を以て、立つて來た、一個の快男子ではあつたが、遂に斯うした、最後を遂げてしまうた。併し、人は死に依つて、其總てが死ぬものではない。古人の諺に『死は生也』と。

▲本篇は、數年前に、刊行した『作田玄輔』に、多少の訂正を加へて、再刊する事にしたのであるが、大隈條約に關する、大部分は、削除してしまつた。いづれ、大隈傳の中へ、訂正して加へる事にしやう。

▲此書には、昔の政界の表裏と、壯士の活躍する、狀態の一班は、可成り盡してある。

▲本篇中の人名には、變名、假名、綽名、いろ〳〵あるが、それは、止むを得ぬ次第と、諒察を乞ふ。

▲『壯士物語』は、全部を一册として出版す可きものを、發行所の編輯者が、誤つて分割した爲に、茲に、その殘部を、續篇として揭げることにした。

昭和六年四月十七日印刷
昭和六年四月二十[illegible]日發行

伊藤痴遊全集　續　第三卷

（第五回配本）

著者　伊藤仁太郎

發行者　下中彌三郎
東京市麴町區下六番町一〇

印刷者　關口一男
東京市麴町區下六番町一〇

（非賣品）

發行所
東京市麴町區下六番町一〇
振替東京二九六三九番
株式會社 平凡社
電話九段 一六六四番 三四七五番 三六四七番

文雅堂印行　三協製本所・手塚製本所　製本

99

560
42

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue	Cyan	Green	Yellow	Red	Magenta	White	3/Color	Black